

留学生の宗教的多様性への対応に関する調査研究: イスラム教徒の事例を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034700

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



留学生の宗教的多様性への対応に関する調査研究

—イスラム教徒の事例を通して—

課題番号 19730518

2007-2008 年度科学研究費補助金
若手研究 (B) 研究成果報告書

2009 年 3 月

研究代表者 岸田 由美
(金沢大学理工研究域講師)

はじめに

本報告書は、2007-2008年度科学研究費補助金若手研究（B）による研究、「留学生の宗教的多様性への対応に関する調査研究－イスラム教徒の事例を通して－」（課題番号19730518）の研究成果をまとめたものである。

大学教育のグローバル化は世界的に関心の高い研究テーマとなっており、国際貿易の一環として高等教育が論議される状況が生まれている。大学全入時代を迎えようとする日本においても、国際関係の発展、教育の質の向上といった観点に加え、人材及び人員の確保という経営的観点から留学生を必要とする状況が拡大してきており、大学の国際戦略づくりが促されている。留学生の多い英語圏の大学では、国内学生に比べるかに高額な学費を留学生に課しつつ、その高額な学費を支払ってくれる留学生の誘致活動、留学生サービスの充実にも力を入れてきた。世界規模で優秀な人材を獲得するには、その大学の教育・研究水準は当然のこととして、留学生の受入れ環境、提供する各種サービスの質も重要な要素となる。

宗教的多様性への対応は、留学生受入れに関わる多様な領域のなかでも、態勢づくりが最も進んでいない領域と言える。日本留学生の75%は東アジアからの学生で占められているが（中国60%，韓国15%，2007年），2007年度よりスタートしたアジア人材資金構想では、東南・南アジアからもより多くの留学生を獲得することが期待されている。また、また、2008年1月に発表された「留学生30万人計画」に関しては、その具体的方策における「戦略的な獲得の対象」として、アジア、欧米、オセアニアに並び、受入れ実績の少ない「アフリカ、中東諸国、中央アジアのNIS諸国など」が位置づけられた（中央教育審議会留学生特別委員会、2008年6月23日）。より多様な地域からの留学生受入れが想定される今日、留学生によつてもたらされるだろう宗教的多様性への対応、多様性に対してより公正な大学環境づくりについても、より現実的に検討すべき段階に来ていると言えよう。

しかし、日本の大学の全国的な対応状況については把握されておらず、検討のための基礎的データ・情報を欠いているのが現状である。また、この問題に諸外国の大学がどのような対応をしているのかも、ほとんど紹介されていない。本研究は、イスラム教徒（以降「ムスリム」）の事例を通して、日本の大学における宗教的ニーズへの対応状況を明らかにし、国際的な動向もふまえながら課題を検証することを目的としている。

海外の事例としては、オーストラリアを取り上げた。オーストラリアは、同じアジア・太平洋地域にあって、日本と同様、東・東南アジアから多くの学生を受入れているほか、日本でも近年関心が高まっている中近東からの留学生増に向けても、既に積極的に動いている国である。留学希望者向けの入学案内にムスリムのための礼拝所情報を記載することも一般的になっており、中には、キャンパス内外のムスリム組織、礼拝施設やレストラン、食料品店情報等を掲載した、ムスリム学生用のガイドブックを発行している大学もある。しかし、オーストラリアの大学におけるムスリム学生向けサービスは、オーストラリア国内におい

ても研究として取り上げられてはおらず、対応状況についてまとめた資料がない。

大学における多文化教育研究としても、本研究の意義は大きい。この研究分野においては従来カリキュラム改革が主な関心事であり、施設・設備といった資源の分配を扱った研究は国際的に少ない。本研究は、大学における、マイノリティ文化の制度化・承認の問題に関して、新たな検討材料を提供しうる。また、その制度化・承認を後押しする要因として、教育的要因、政治的要因以上にしばしば強力とされる経済的要因が、大学の意思決定どう影響しているか、そのダイナミズムの一端を示すものともなるだろう。

以上の課題意識に基づき、日本及びオーストラリア双方の大学の取り組みについて、量的及び質的な調査を行った。本報告書では、その調査結果を2部構成で示す。第1部では、一定数以上の留学生が在籍する、国内143大学を対象として実施した質問紙調査（2007年12月～2008年3月、回収率48.9%）の結果と、内4大学を対象に2008年6月～11月に実施した現地調査に基づいて、日本の大学の取り組みについて報告する。第2部では、オーストラリアの全39大学（国公立37大学、私立2大学）を対象に公式ウェブサイトを通じて行った情報収集の結果と、内7大学を対象に2007年9月末～10月初めに実施した現地調査の結果を基に、オーストラリアの状況について報告する。

留学生教育、宗教的マイノリティとホスト社会との関係は、それぞれ重要な研究関心事となっているにも関わらず、宗教的ニーズに配慮した留学生サービスの提供に関しては、日本国内外において先行研究が少ない。本研究が、グローバル化を進める日本の大学に基礎データを提供し、国際戦略づくりや留学生サービスの向上に資することができれば幸いである。

最後に、この研究の意義を理解し協力して下さった、日本及びオーストラリアの大学教職員、ムスリム学生の方々に、深く感謝申し上げる。

2009年3月
岸田 由美

【研究組織】

研究代表者 岸田由美 金沢大学理工研究域講師（留学生専門教育教員）

【交付決定額】

2007 年度	1,000,000 円（内直接経費 1,000,000 円）
2008 年度	1,040,000 円（内直接経費 800,000 円）
総計	2,040,000 円（同 1,800,000 円）

【研究発表】

1. Kishida, Yumi, "Muslim International Students and Japanese Universities: Toward a More Inclusive Campus", CIES 52nd Annual Conference, Teacher's College, Columbia University, New York, NY, March 17, 2008.
2. 岸田由美「留学生の宗教的多様性と日本の大学—イスラム教徒のニーズへの対応を巡って—」日本国際理解教育学会第18回大会自由研究発表, 富山大学, 2008年6月15日
3. 岸田由美「ムスリム留学生のニーズに応えるキャンパスづくり—日本とオーストラリアの比較—」留学生教育学会第13回大会, アルカディア市ヶ谷, 2008年8月2日

目 次

第一部 日本の大学の状況

はじめに -----	1
1. 回答校の概要 -----	2
2. ムスリム留学生の在籍状況 -----	4
3. 大学の周辺環境 -----	6
4. ムスリム留学生組織 -----	8
5. ムスリム留学生向けガイドブック -----	8
6. 礼拝用施設・設備 -----	8
7. 学生食堂におけるハラールフードメニュー -----	12
8. 留学生の宗教的ニーズへの対応に関する認識 -----	16

第二部 オーストラリアの大学の状況

はじめに -----	20
1. グローバルな「学生市場」におけるムスリム留学生への関心の高まり -----	21
2. オーストラリアの大学における宗教関連学生サービスの全国的状況 -----	22
3. 学内礼拝施設・設備と宗教者によるサービスの実際 -----	23
3-1. 多信仰の宗教センターとムスリム・チャップラン -----	24
(1) クイーンズランド大学	
(2) シドニー大学	
(3) モナシュ大学	
3-2. 独立施設の事例 -----	27
(1) 南クイーンズランド大学	
(2) クイーンズランド大学	
(3) モナシュ大学	
3-3. 一般棟内に設けられた礼拝施設の事例 -----	31
(1) シドニー大学	
(2) ニューサウスウェールズ大学	
(3) メルボルン大学	
4. 学内食堂におけるハラールフードの提供事例 -----	35
5. 大学が宗教的サービスを提供することの意義 -----	37

資料 質問紙調査票

オーストラリアの全大学における礼拝施設開設状況

第一部図表

図 1 回答校数：大学設置形態別-----	2
図 2 回答校数：2007 年度留学生在籍数別-----	2
図 3 回答者の属性 -----	3
図 4 大学の留学生受入れ政策 -----	3
図 5 ムスリム留学生の認知在籍数：全体 -----	5
図 6 ムスリム留学生の認知在籍数：大学設置形態別-----	5
図 7 大学の周辺環境 -----	6
図 8 ムスリム学生組織の有無：全体 -----	7
図 9 ムスリム学生組織の有無：ムスリム留学生認知在籍数別 -----	7
図 10 礼拝可能なスペースの提供状況：全体-----	9
図 11 礼拝可能なスペースの提供開始時期 -----	10
図 12 礼拝可能なスペースの提供状況：大学設置形態別 -----	10
図 13 礼拝可能なスペースの提供状況：ムスリム留学生認知在籍数別-----	11
図 14 礼拝用施設提供の難しさ：大学設置形態別-----	11
図 15 ハラールフードへの対応状況：大学設置形態別-----	12
図 16 ハラールフードへの対応状況：ムスリム留学生認知在籍数別-----	13
図 17 宗教的ニーズへの対応の重要度 -----	16
図 18 重要と考える理由（宗教的ニーズに対応する意義）：全体 -----	16
図 19 重要と考える理由（宗教的ニーズに対応する意義）：大学設置形態別---	17

第一部　日本の大学の状況

はじめに

ここでは、一定数以上の留学生が在籍する、国内143大学を対象に、ムスリム留学生の宗教的ニーズへの対応状況を尋ねた質問紙調査の結果と、回答校の内4大学を対象に実施した現地調査の結果に基づいて、日本の大学の取り組みについて報告する。

質問紙調査の回答は、当該大学に勤務する留学生教育担当者各1名から寄せられたものであり、必ずしもその大学の全学的な状況、正確な数値を反映しているわけではない。学生の宗教的信条に関して統計ではなく、本調査結果に示す各大学におけるムスリムの在籍状況は、あくまで回答者の認識、把握している情報に基づくおよその数値となる。その他の回答項目についても、特に担当者やキャンパスが多岐にわたるような大学においては全学的な状況の把握が困難な場合も多いため、わかる範囲での回答を依頼した。

個別項目の解説中に示す事例は、質問紙調査に寄せられた回答に加え、本現地調査によって収集した情報に基づいている。当該の取り組みについて既に大学として公表している場合や公表可と回答を得た場合を除き、大学名は伏せる。

なお、すべて情報は調査時点のものであり、必ずしも最新の状況を反映しているものではない。

【質問紙調査概要】

ムスリム留学生の在籍状況に関する統計はないため、全体としての留学生在籍数が多い大学を調査対象とした。日本学生支援機構より、2006年留学生在籍数調査結果に基づき、国公大学法人（以下国立大学）の場合は在籍100人以上の67大学、公・私立大学の場合は在籍200人以上且つ非宗教系の76大学、計143大学を抽出し、各大学の留学生センター、センターがない場合は留学生担当事務部局に対して、2007年11月に調査票を送付した。国立と公・私立で選出基準となる留学生在籍数に違いを持たせたのは、世界各地から選抜された国費留学生の受入れが多く、出身地域のばらつきが比較的大きい国立大学に、ムスリム留学生の在籍が多いことが予測されたためである。調査の回収率は、国立大学で46%、公・私立大学で51%、全体で49%であった。

【現地調査概要】

質問紙調査の結果から、礼拝用施設・設備の提供、学生食堂における戒律にそった食事（ハラールフード）の提供が確認された大学4校を、2008年6月～11月の間に個別に訪問し、関係教職員やムスリム留学生へのインタビュー、施設・設備の見学を行った。

1. 回答校の概要

図1は回答者の所属する大学について、設置形態別で見た件数、図2は、調査実施年度である2007年度の留学生在籍数調査結果に基づいて、留学生受入れ規模別で見た件数である。

図3には、回答者の属性を示した。国立大学については留学生センター等所属の留学生担当教員、公・私立大学については留学生担当事務職員が、主な回答者となっている。

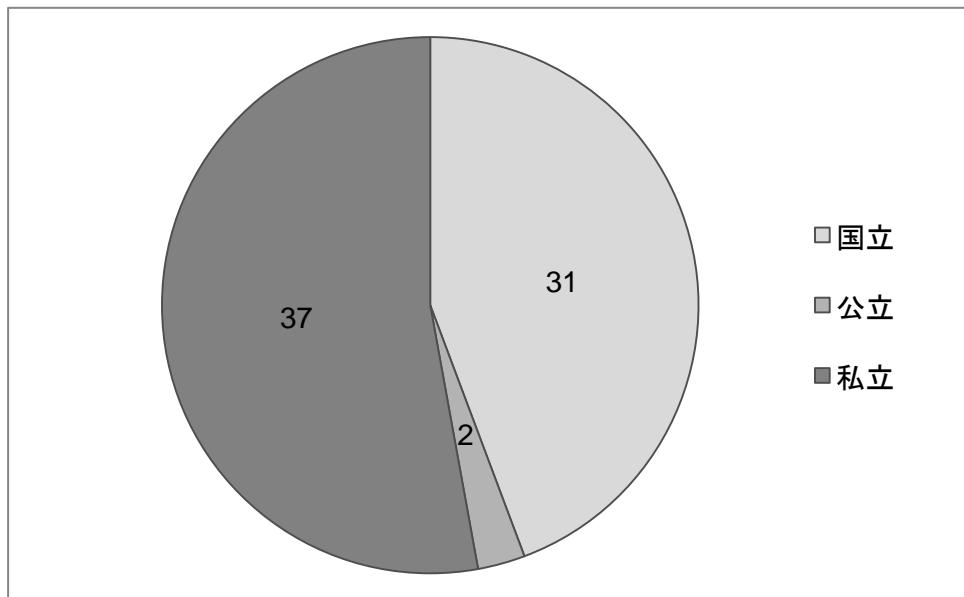


図1 回答校数: 設置形態別 n=70

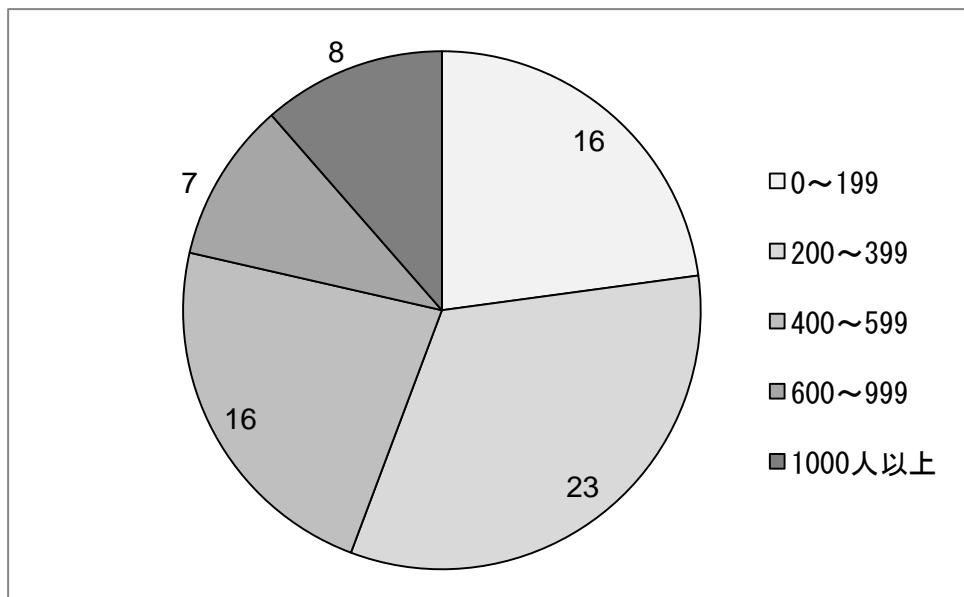


図2 回答校数: 2007年度留学生在籍数別 n=70

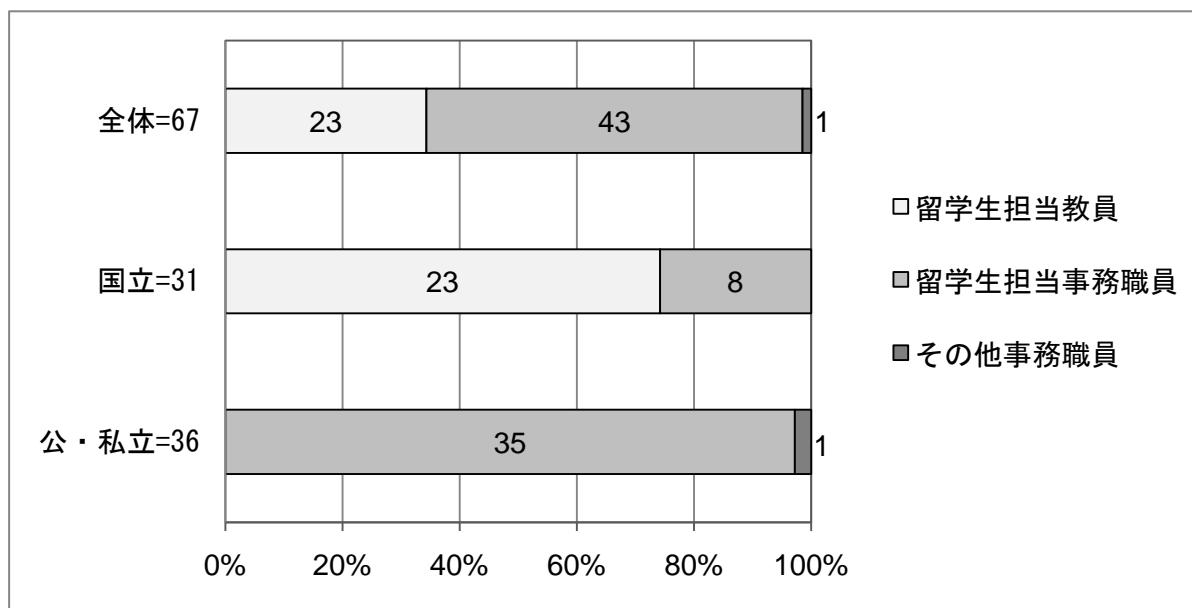


図3 回答者の属性 n=67

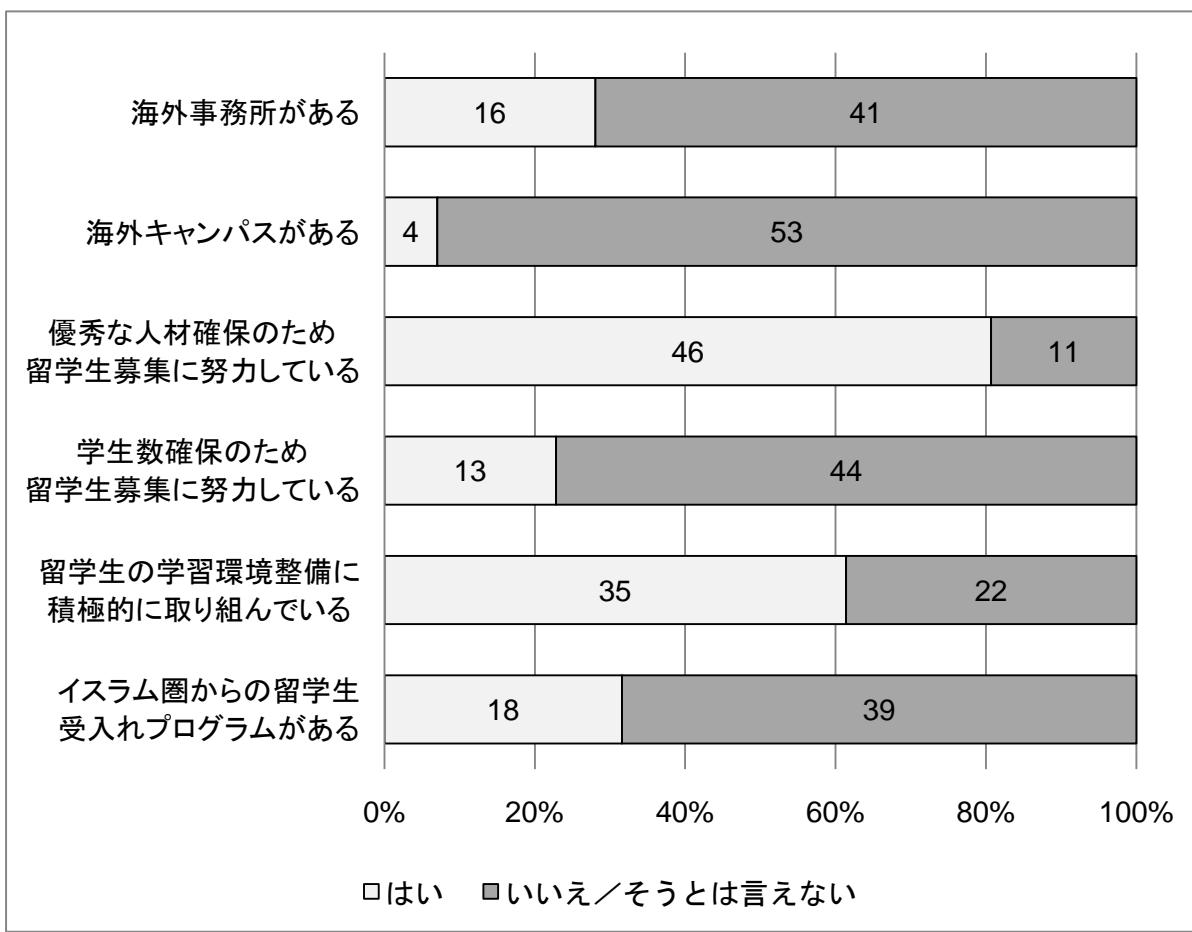


図4 大学の留学生受け入れ政策（複数回答） n=57

図4は、それぞれの大学の国際展開の状況、留学生教育への関心や積極性など、留学生受入れ政策について尋ねた結果を示したものである。

海外事務所については、国立で10大学、私立で6大学があると回答している。所在地についての記入を見ると、範囲はアジア、北米、ヨーロッパ圏に広がっており、10校が複数国に事務所を展開している。海外事務所の所在地としては中国が最も多く11大学、次にアメリカが5大学、タイが4大学であった。すべての大学がアジア圏に事務所を持っており、アジア圏にしか事務所を持たない大学も6校含まれる。アジア圏で名前があがった国名は、中国、タイ、韓国、台湾、ベトナム、シンガポール、インドであった。海外にキャンパスを開設する大学は私立で4校のみで、うち3校がアメリカであった。

設置形態を問わず優秀な人材確保の一途としての留学生への注目度は高く、国立で78%、公・私立で83%が重視していると回答した。一方、学生数確保の一途としての留学生獲得に関しては、力を入れていると答えた大学は国立では約7%，公・私立では37%と差が見られた。学習環境改善に積極的に努力しているという回答についても、国立で70%，公・私立で53%と差が見られた。

イスラーム圏との留学交流プログラムの有無については、国立では48%が何らかの形でプログラムを有しているのに対し、私立では17%程度と比較的少数であった。

2. ムスリム留学生の在籍状況

日本学生支援機構による2007年留学生在籍数調査によれば、イスラームが主な宗教となっている国からの留学生は8千人弱（その34%が国費留学生）である。しかし、その全員がムスリムとは限らず、また逆に、一定のムスリム人口を抱える国は世界に広がっているため、他の国籍の留学生の中にもムスリムはいるだろう。留学生の信仰について把握する統計はないため、大学がムスリム留学生の正確な在籍状況を把握することはできない。従って、ここに示すのは各大学の留学生に身近な所にいる教職員が認識している範囲での数値ということになる。日常の接触を通じての知見や服装、もしくは礼拝に集まっている人数など、様々な判断材料があるが、大学の規模が大きくなればなるほど一人の教職員が把握することは困難になるので、実数はより多いかもしれない。

図6は大学設置形態別に在籍状況を比較したものであるが、傾向としては、調査対象校選定時の仮説通り、ムスリム留学生の在籍は国立大学に集中していることが明らかとなった。国立では在籍ゼロは1校のみ、10人未満も2校のみであったが、公・私立大学の場合在籍ゼロが15校（41%）、10人未満が14校（38%）に上った。留学生数が全体として1000人超の大学であってもムスリムは10人未満というケースもあり、在籍割合は少ないケースがほとんどである。

留学生数全体とムスリム留学生数の多少は必ずしも比例しないことも確認された。国立

の場合、留学生在籍600人以上の大学はすべてムスリム学生も50人以上との回答であったが、同時に、留学生在籍200人未満の層でも、ムスリム学生は50人以上という大学が11校中3校あった。ムスリムの割合が5人に1人以上と高い大学は留学生250人以下に集中しており、国立で6校、私立で1校が該当した。顕著な例としては、留学生の3人に2人以上がムスリムというケースが国立で1件あった。

なお、在籍なしと回答した16校については、次ページ以降の分析対象には含まれない。

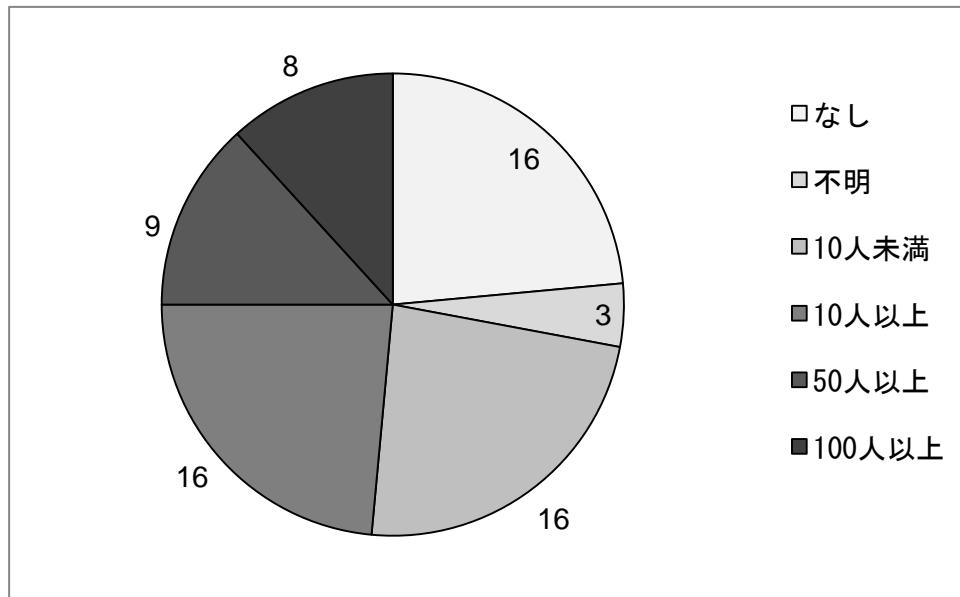


図5 ムスリム留学生の認知在籍数：全体 n=68

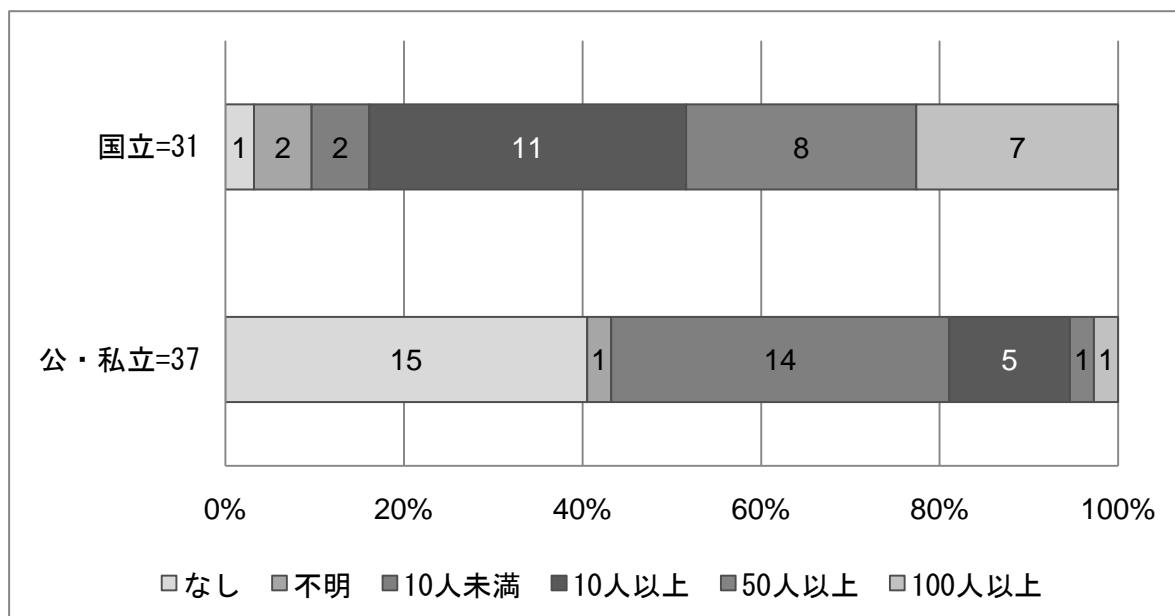


図6 ムスリム留学生の認知在籍数：大学設置形態別 n=68

3. 大学の周辺環境

図7は、大学の周辺環境について尋ねた結果をまとめたものである。留学生に限らず外国人をよく見かけるという回答が8割近くに達し、6割以上において、地域社会でムスリムを見かける環境があると回答している。

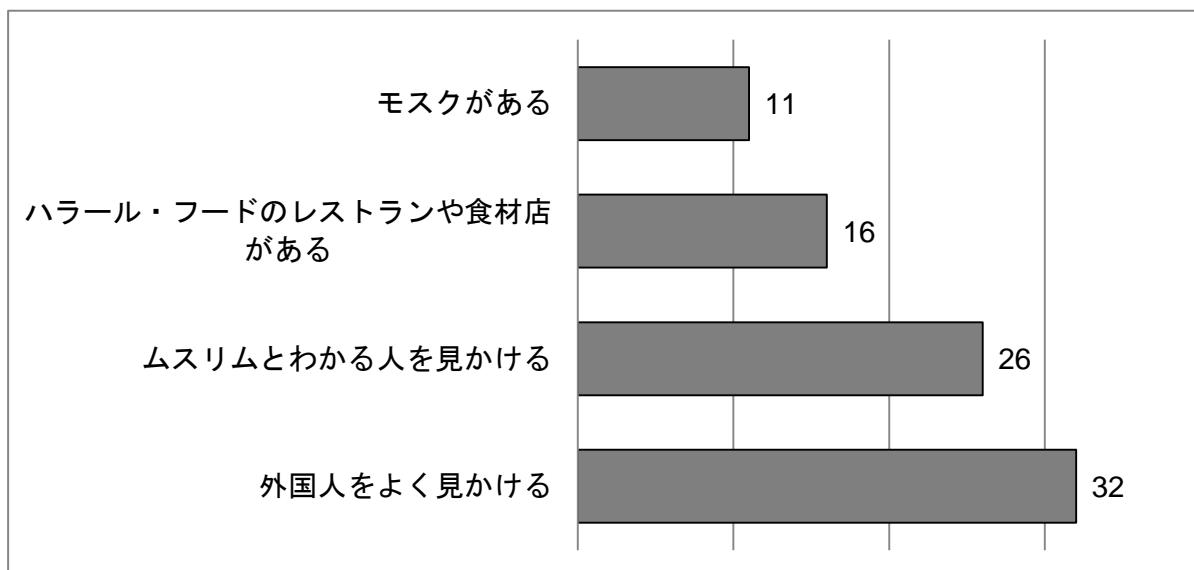


図7 大学の周辺環境 (複数回答) n=42

4. ムスリム留学生組織

ムスリム留学生に関する学生組織の有無を尋ねた結果をまとめたものが図8である。国籍を超えた宗教ベースの組織の存在が把握されている大学は10校、礼拝等集まる機会はあるが組織としては活動していないという大学が15大学あった。宗教単位ではなく出身国ベースの留学生会が、イスラーム圏の国について存在すると回答した大学は15校あり、内7校では、ムスリム留学生会も存在している。図9は、ムスリム留学生の認知在籍数別に分析したもので、在籍数が多くなるほど学生の組織化も進んでいることがわかる。ムスリム学生組織がない、と回答した大学の中には、学内としてはないが地域単位であるという事例も含まれる。

ムスリム学生会は学生サークルとして公認団体になっている場合と、なっていない場合双方がある。公認サークルとなっている事例としては、東京大学の「イスラム文化研究会」が1993年設立と比較的古い。こうした組織では、出身国をブロック化して（東南アジア、南アジア、中近東など）それぞれの代表者を選抜し運営委員会を構成するなど、イスラーム文化の多様性が反映される仕組みとなっている。こうした各大学の学生組織の全国組織

として、Muslim Students Association in Japan (MSAJ)¹があり、ウェブサイトや会報、年次大会等により、全国のムスリム留学生が各大学や地域の情報等を交換しあっている。

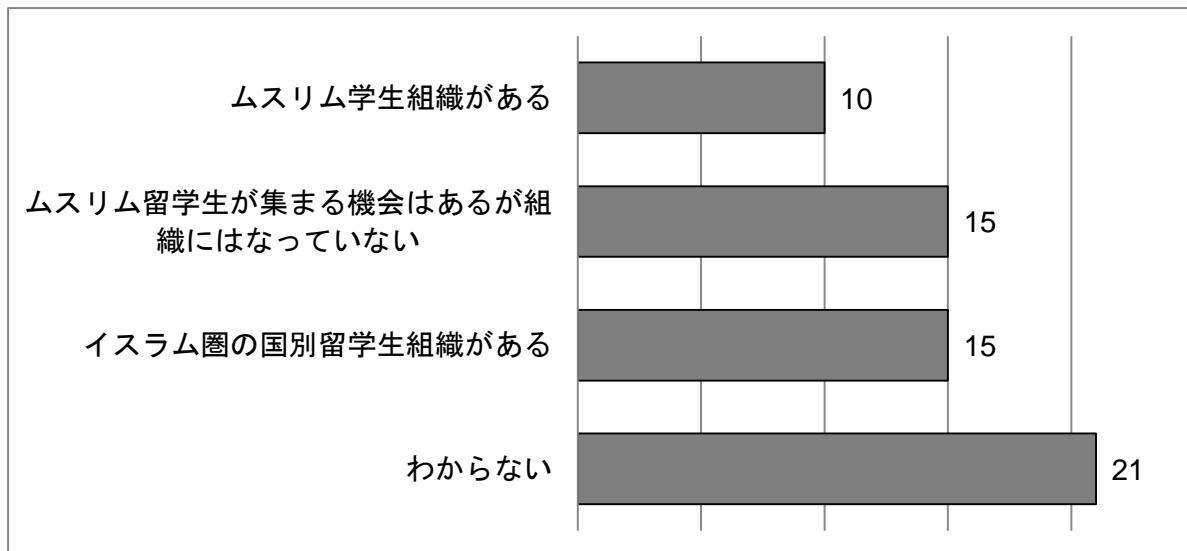


図8 ムスリム学生組織の有無：全体（複数回答） n=51

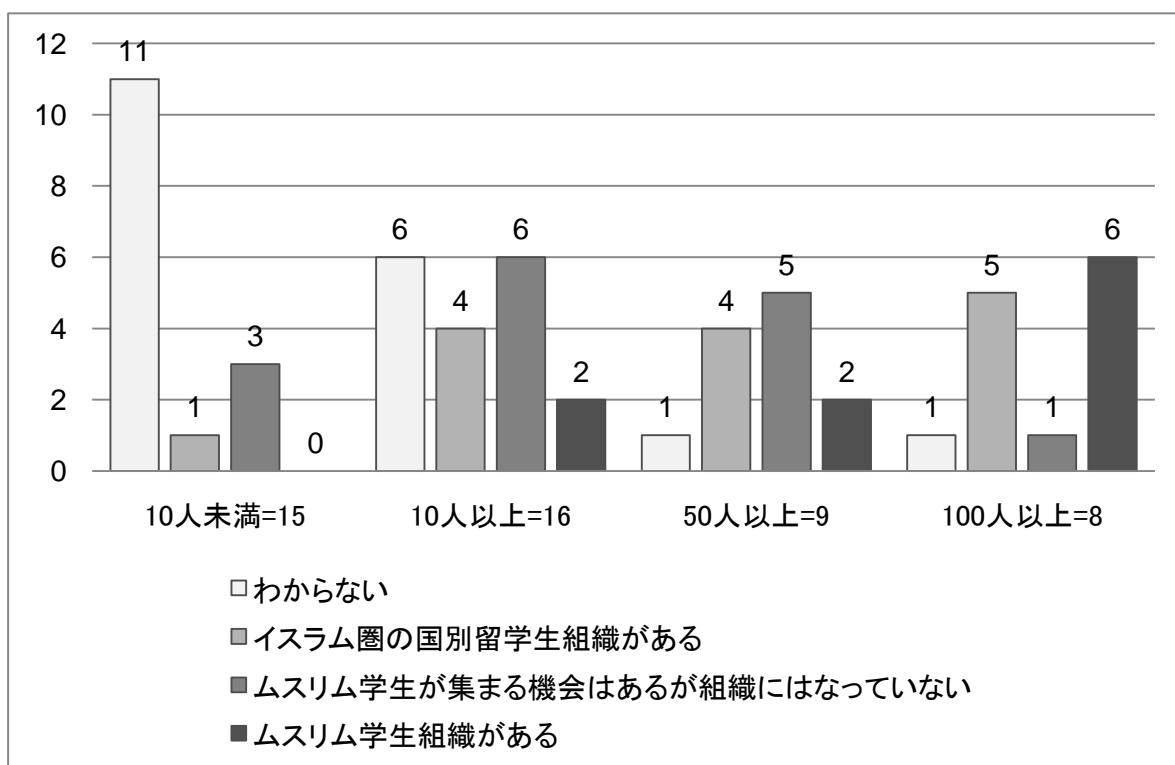


図9 ムスリム学生組織の有無：ムスリム留学生認知在籍数別（複数回答） n=48

¹ Muslim Students Association in Japan [http://msaj.info/]

5. ムスリム留学生向けガイドブック

第二部に示すオーストラリアの例では普及傾向にある、ムスリム学生向けの大学及び地域のガイドブックについて、日本では、作成している大学は皆無、検討したことはあるという大学も2例のみであった。対象を特化した冊子の必要性は認識されていないようである。留学生一般対象のガイドブックの中にムスリム向け情報も記載しているので別個には必要ないという回答もあった。

6. 礼拝用施設・設備

ムスリムには1日5回の礼拝が義務づけられており、その内、正午過ぎ、午後、日没後の3回の礼拝は一般的な修学時間帯と重なる。休み時間内に容易に往復出来るほど自宅や地域のモスクが近くにない限り、学内で礼拝する必要が出てくる。日常の礼拝は空き教室の利用等で学生個人がやりくりすることもできるが、「金曜礼拝」と呼ばれる毎週金曜正午過ぎの礼拝には、特定の部屋の確保が要請される。というのも、金曜礼拝は合同で行われ、男性には参加義務があること、説教や祈りの合唱もあることから、まとまった人数で数十分に渡り占有でき、音をたてても周囲に迷惑にならない空間が必要なためである。近接して地域のモスク等がない場合、大学施設の利用ニーズが高まることになる。

なんらかの形で礼拝用のスペースを提供しているという回答は、47大学中25大学(53%)からあった（図10参照）。提供事例は近年増加傾向にある（図11参照）²。提供経緯については回答があった23例すべて学生からの要望に対応したというもので、ムスリム留学生が増えるにつれ、学内での礼拝スペース提供への要望が高まってきてていることがわかる。在籍が少ない公・私立大学の場合、特に要望がなく提供していないという回答が多かった。

最も多い回答は、一般的な教室や会議室、会館や寮の集会室等について、決まった日時ムスリム留学生に利用を許可しているという形である。一般的な予約制度により提供している場合、予約者が学生（学生団体）の場合もあれば、世話役の教職員の場合もある。「礼拝用」と特定せず、学生の集会用等一般的な利用目的にしている大学も少なくないようだ。

ムスリム専用の礼拝施設を有する大学は皆無であったが、国立大学1校で、留学生センターのロビーに、宗教不特定の礼拝用スペースを区画している事例があった。また、特に礼拝用施設ではないが、ムスリム留学生が専用で利用している固定的なスペースがあるという回答も5件あった。そのうち3件が少数在籍校（在籍10人未満、20人未満、30人未満で各1件）であり、固定スペースの有無には在籍数の多少よりも個々の大学の事情が左右している面が大きいようである。サークル室として公式に割り当てている場合もあれば、非公

² 図11は、特に90年代以前について、正確な開始年が不明でおおよその年代で回答があつたものを含む。

式に提供していたり、学生が礼拝に利用していた人気がない空間（屋上に抜ける階段の踊り場など）が固定化し、実態として礼拝場所になっていたりする例もある。固定的なスペースはないとの回答を得た大学についても、知る人ぞ知る固定化した礼拝スペースが確認されたケースもある。また、「一定時間利用を許可している施設がある」に含まれる事例の中にも、実態として許可時間以外も常時ムスリム留学生が利用しており、専用の部屋になっている事例も確認されている。このような「実態としての礼拝所」は、実際はもっと多くの大学にある可能性がある。

礼拝のために大学の施設を提供することについて、どんな困難点があるか自由記述で回答してもらった。図14はその主な要素を分類し、複数回答で数値化したものである。全体としては、施設・予算不足が理由として多くあげられた（24校中12校）。学生全体から見て極少数の者に、大学のリソースを割り当てるこの困難性は、特に私立大学において主たる理由となっている。並んで多かったのが、特定の宗教集団にだけ便宜を図ることは問題がある、他の集団に対して公平性を欠く、といった意見であった。これは国立大学では最多回答となっている。第二部に示すオーストラリアと異なり、日本の非宗派立大学では、宗教関連の学生サービスを行うことが一般的ではなく、警戒感もあることがわかる。宗教には一切関わらないという姿勢を持つ大学もあった。

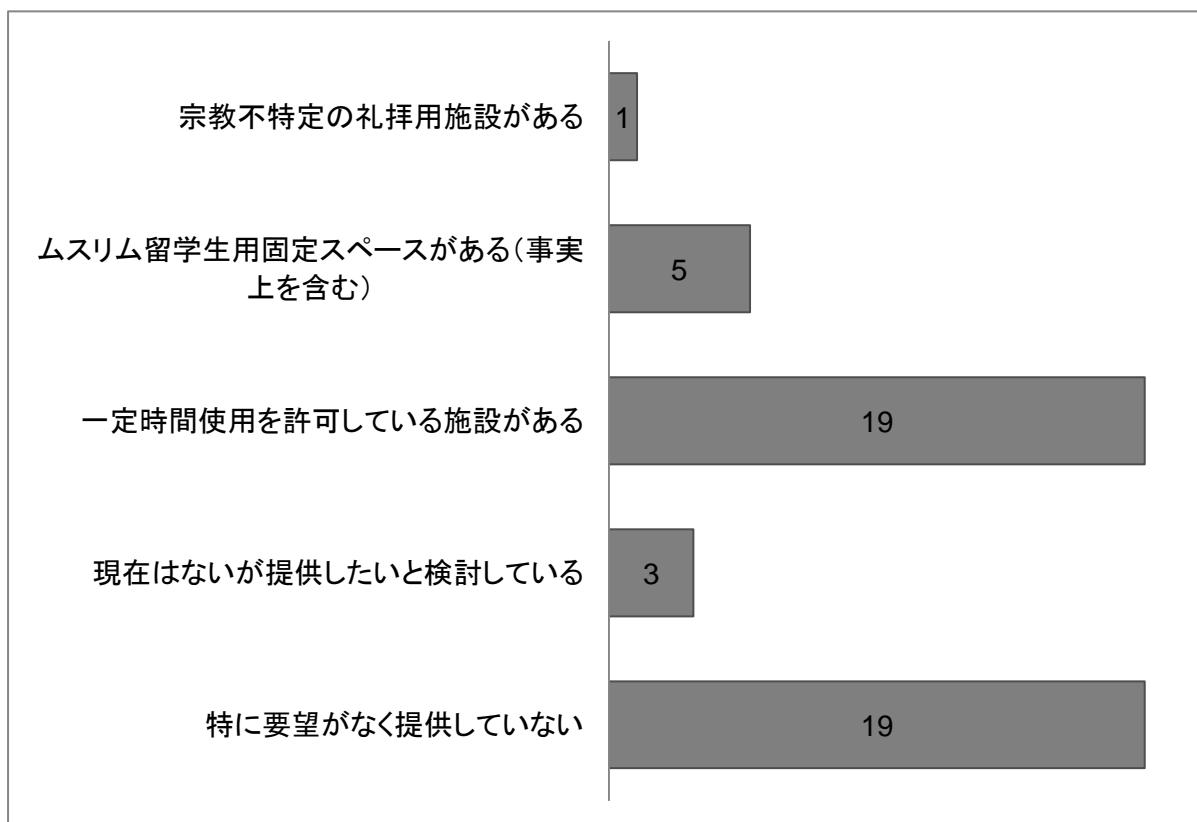


図10 礼拝可能なスペースの提供状況：全体（複数回答） n=46

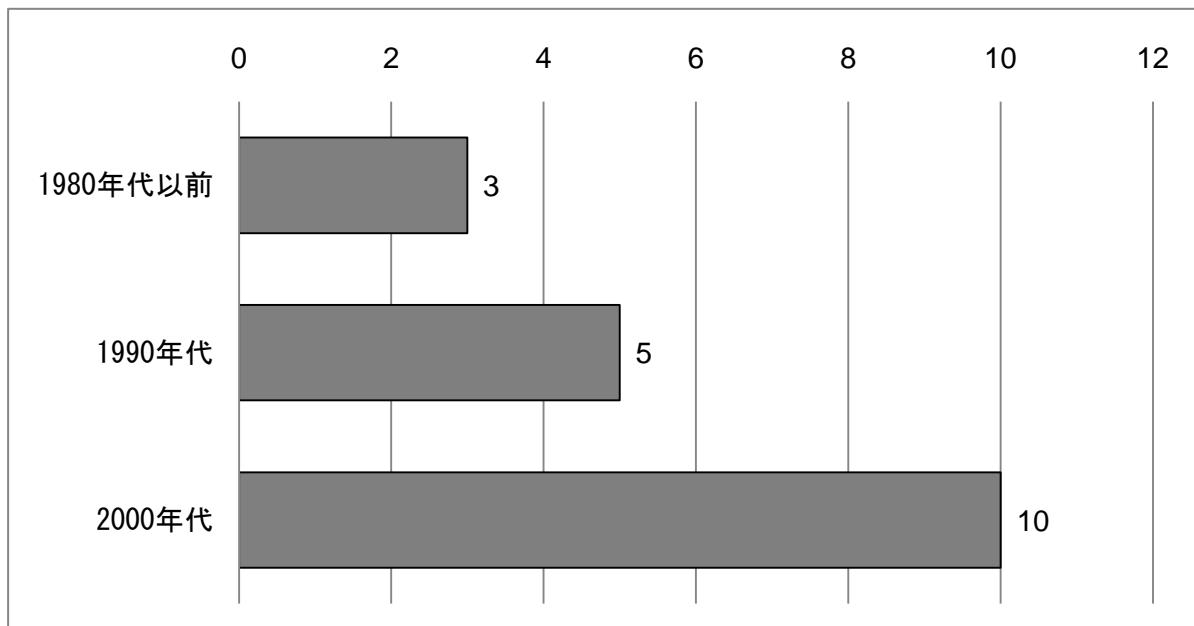


図 1 1 礼拝可能なスペースの提供開始時期 n=18

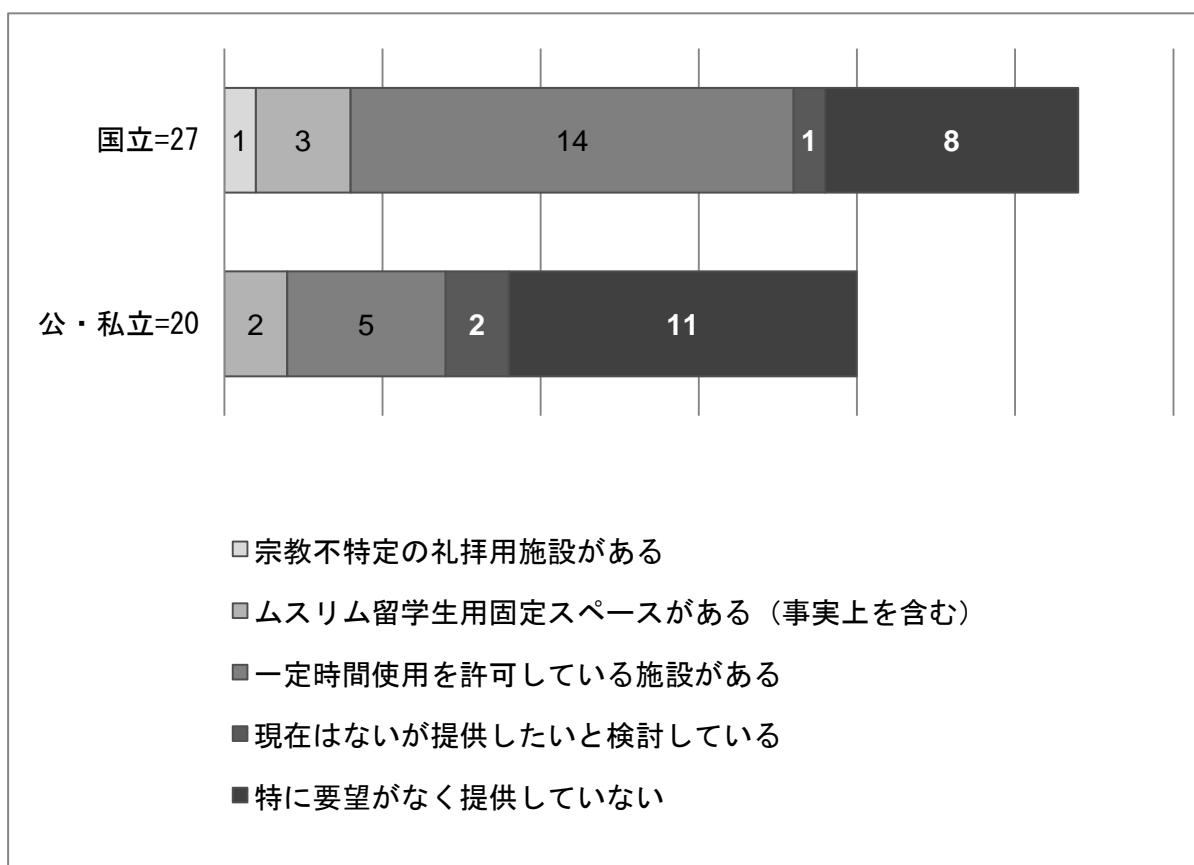


図 1 2 礼拝可能なスペースの提供状況：大学設置形態別（複数回答）

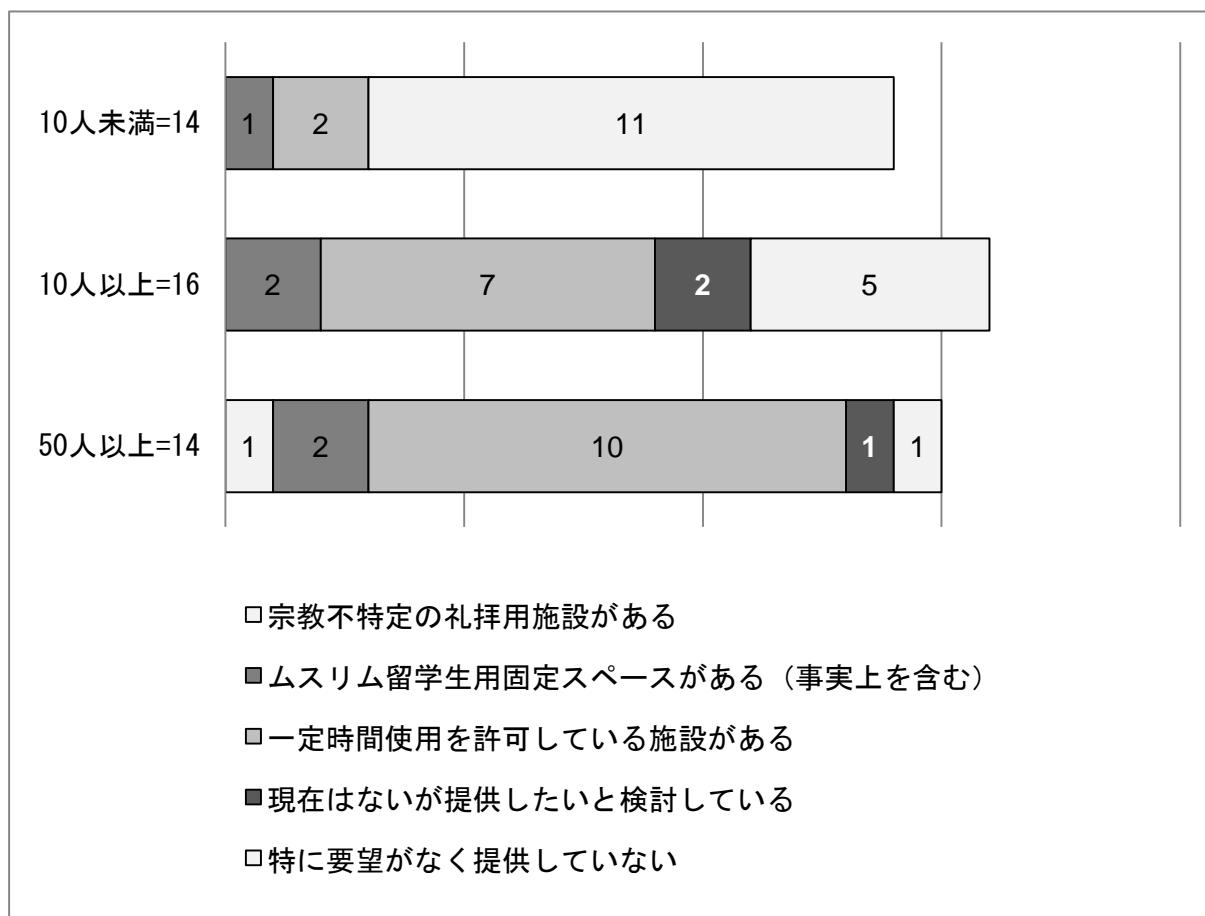


図13 礼拝可能なスペースの提供状況：ムスリム留学生認知在籍数別（複数回答）

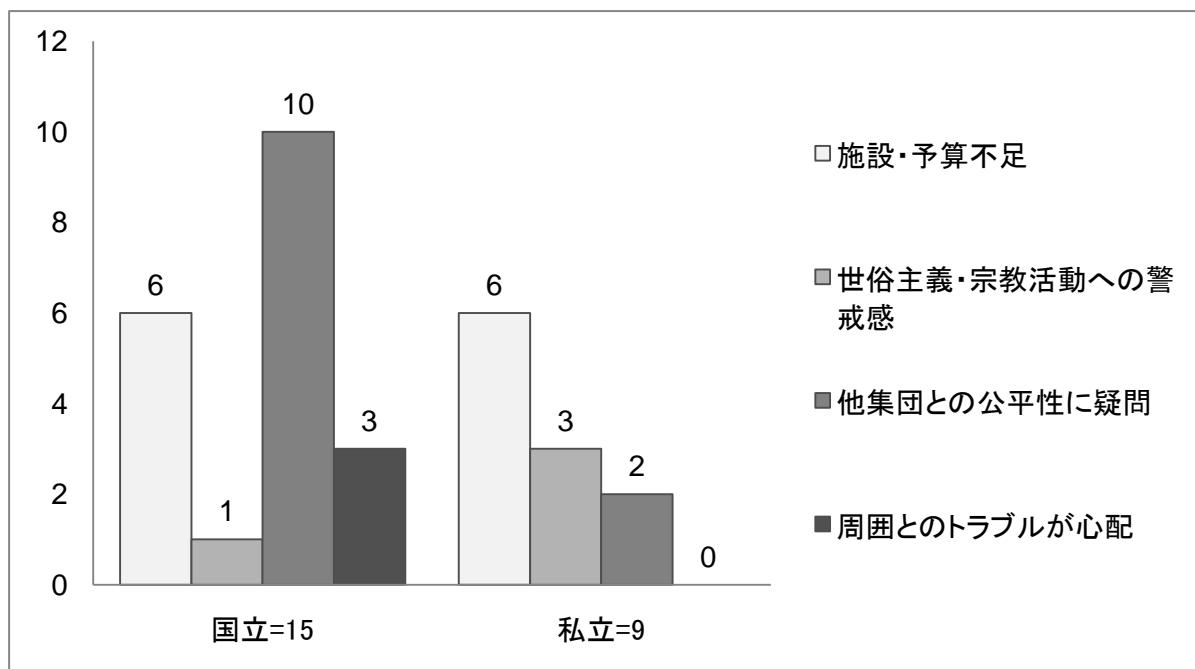


図14 礼拝用施設提供の難しさ：大学設置形態別（複数回答） n=24

7. 学生食堂におけるハラールフードメニュー

食堂のメニューを見て、使われている食材や調味料を判断することは一般に難しい。特に留学生にとって、その料理自体なじみがないことであれば、日本語での食品名が読めない／わからないことも多くあるだろう。ムスリム留学生にとって、自分が口に入れるものがハラールであるかどうか（イスラームの戒律で禁止されている食材が使われていないか、調理から提供に至るまで、禁止食材と許可食材が適切に隔離されているかなど）は、非常に基本的な問題であり、授業や研究活動の合間に確実に発生する日常的で切実な問題である。しかし、メニューから判断できず、言語力不足から口頭での確認も困難な場合、結局自分あるいは家族が調理したものを、帰宅するか持参して食べることになり、研究・学習時間が制約されるケースも多い。配偶者がいない学生にとっては特に切実な問題と言える。

戒律にのっとった食材・調理法によるメニューを学生食堂で提供し、それをハラールフードとして表示しているという大学は、44大学中6大学であった。多数在籍校で対応が進んでいる。確認されている中では、大阪大学吹田キャンパスで1995年から提供を開始した例が最も古い³。近年では、名古屋大学で2005年6月（ハラールミートの提供は2008年6月から）、東京大学で2006年12月、東北大学で2007年4月から提供が始まっている。ハラールマークのついたメニュー数は大学によって様々である。

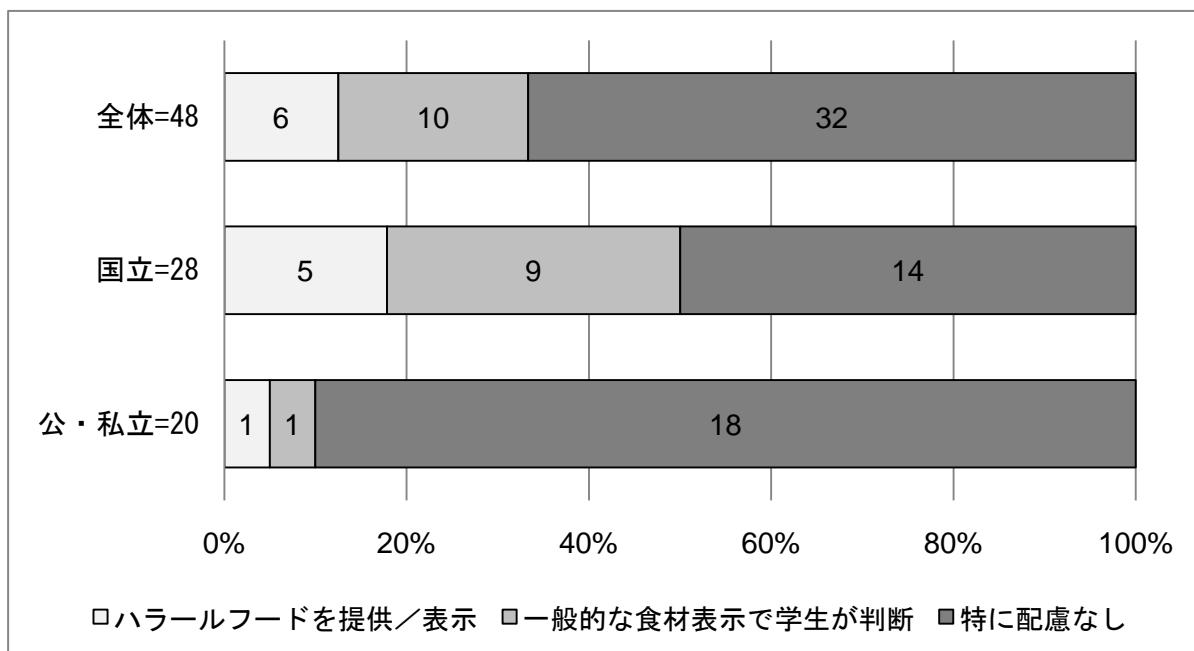


図15 ハラールフードへの対応状況：大学設置形態別

³ 古城紀雄「大阪大学生協でのハラールフード提供」『留学生交流・指導研究』第2巻, 1999, pp.61-64.

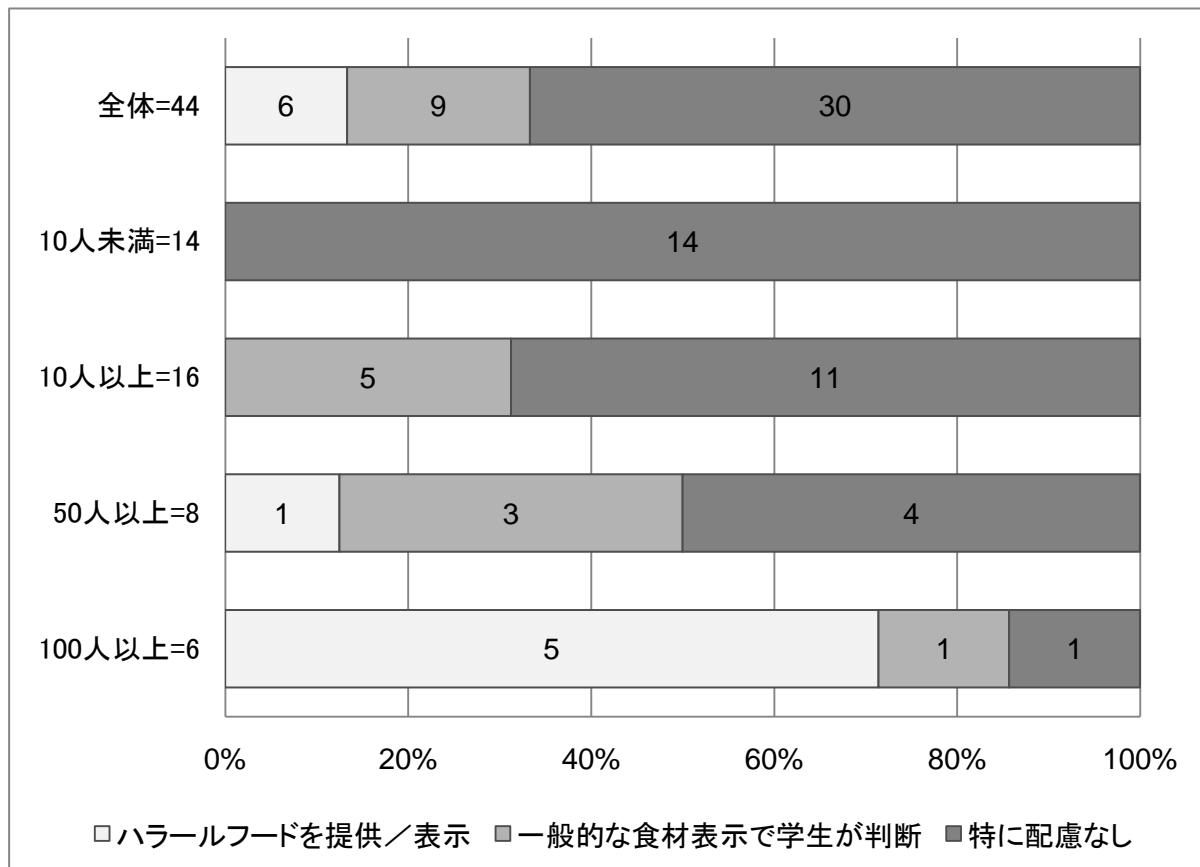


図16 ハラールフードへの対応状況：ムスリム留学生認知在籍数別

大阪大学の場合、1995年6月より、昼食時に毎日1品魚料理でのハラールフード提供を開始し、1996年度より、ハラールチキンによるメニューも導入された。現在は、「ハラル白身魚フライ」と「ハラル唐揚げ」の2種が、一般の白身魚フライ、唐揚げと同額の280円で毎日提供されている。同メニューをハラールと一般分けて販売しているのは、専用フライヤーだけでは調理できる量が限られるため、豚肉等様々なフライをするフライヤーでも調理する必要があるためとのことであった。

東京大学では、本郷キャンパス内2箇所の食堂でハラールフードが提供されている。生協食堂では、チキン唐揚げ(190円)、サンマの塩焼き(160円)、野菜料理類、ツナクリーミスパゲティ、ホタテクリームシチューなど、多くのメニューにハラールマークがつけられていた。唐揚げも焼き魚について別立てメニューは用意されていない。いずれのハラールマーク付きメニューも、全利用者が販売対象となっている。

東北大学では、「東北大学の国際化推進プロジェクト」(2006年10月～2007年3月)の一貫として「キャンパスにハラール・フードを！」プロジェクトが展開された⁴。2007年4

⁴ 末松和子・阿栄娜「異文化間協同プロジェクトにみられる教育効果」『異文化間教育』第28号、2008、pp.114-121。

月より、工学部中央食堂に於いて、週2回、ケータリングによるハラールカレー（480円）の提供がスタートし、メディアでも報道された⁵。その後生協食堂での調理も始まり、現在ハラールチキンを用いたメニューとして、タンドリーチキンとベーカードチキンの2種類が當時（デリカバーに含まれ、100グラム126円）、カレーとストロガノフのいずれかが週替わり（Mサイズで320円、一般のカレーメニューはポークカレーで同サイズ231円、チキンカツカレーで同357円）、計3種が毎日提供されている。ハラールカレーを生協で調理するにあたっては、既に提供を行っていた立命館アジア太平洋大学まで担当者が足を運び、準備を進めたという。ケータリングによるカレーの提供も継続しており、週二日のランチタイムに、4種類のハラールカレーが、地域のバングラディッシュ・インド料理店による「本格カレー」として、数量限定で提供されている（Mサイズで480円）。特にタンドリーチキンとベーカードチキンは、デリカバーにあることから一般の学生にも人気メニューとなっているそうだ。唐揚げでなくベーカードで提供しているのは、専用フライヤーを用意するよりも容易に対応出来るからだという。

名古屋大学では、ハラールチキンを使ったメニュー1種（唐揚げ丼、タンドール・チキン、スペイシー炒め、チキン味噌焼きの4種類を2日ごと交代で提供）と、海鮮の丼もの、うどんやそば、野菜コロッケ、お味噌汁、サラダ類など、約20種類がハラールとして提供されている。チキン唐揚げ丼でソースを分けている以外は、同メニューをハラールと一般に分けて販売することはしていない。ハラール・チキンメニューは2008年6月から提供を開始したところだが、昼のみの営業で1日70～80食は出る、一般に人気なメニューになっているという（ムスリムの利用者は、カウンタースタッフによれば20人程度ではないかとのこと）。

生協ではメニューや仕入れ先等がエリア毎に統一されているため、各大学店舗が独自の対応をすることは容易ではない。このような取り組みはすべて、ムスリム学生、大学教職員、生協職員の交渉と努力の積み重ねにより実現したもので、相当な準備期間、試行期間を経ての成果である。上に紹介したいずれの食堂でも、経済性や効率性の面では負担が増すにもかかわらず、食堂スタッフがムスリム学生にとっての利便性を考え、非常に好意的かつ積極的に対応していることが強く印象に残った。このようなサービスを提供することの意義も、強く意識されているようである。例えば東北大学生協は導入にあたって、「イスラム教徒の方でも安心して生協食堂が利用できるように」、「このことはキャンパスの国際化に対応し、大学への貢献へつながる」等、意義を語っている⁶。

⁵ 朝日新聞2007年4月7日「イスラムカレー、東北大生協に登場 『留学生向けに』」等
[<http://www.asahi.com/food/news/TKY200704030311.html>] (2009年3月18日)

⁶ 東北大学生活協同組合理事会室長・小野塚一郎「東北大学生協のハラールフード提供について」『COOP Calendar』第82号、2007。
[<http://www.miagi.coop/kenren/calendar/82gou/tankyo.htm>] (2009年3月18日)



大阪大学吹田キャンパス生協食堂 アペティ



東京大学本郷キャンパス 生協第二食堂



名古屋大学生協食堂 フレンドリイ南部



東北大学青葉山キャンパス生協食堂 工学部中央食堂



8. 留学生の宗教的ニーズへの対応に関する認識

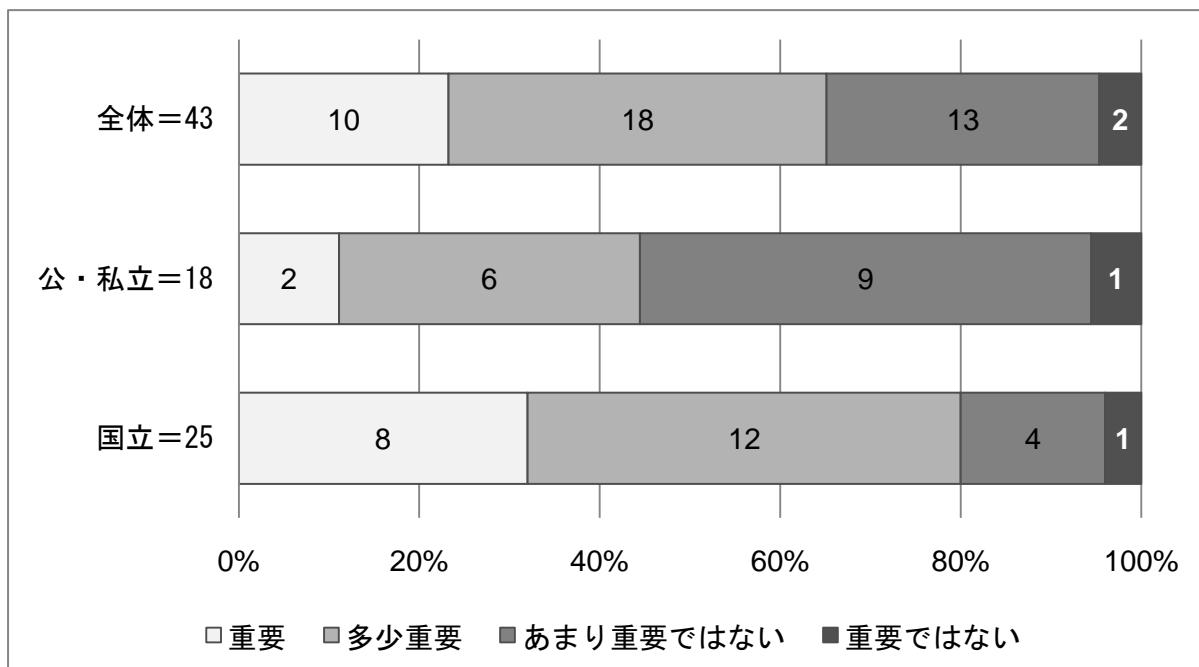


図 1.7 宗教的ニーズへの対応の重要度

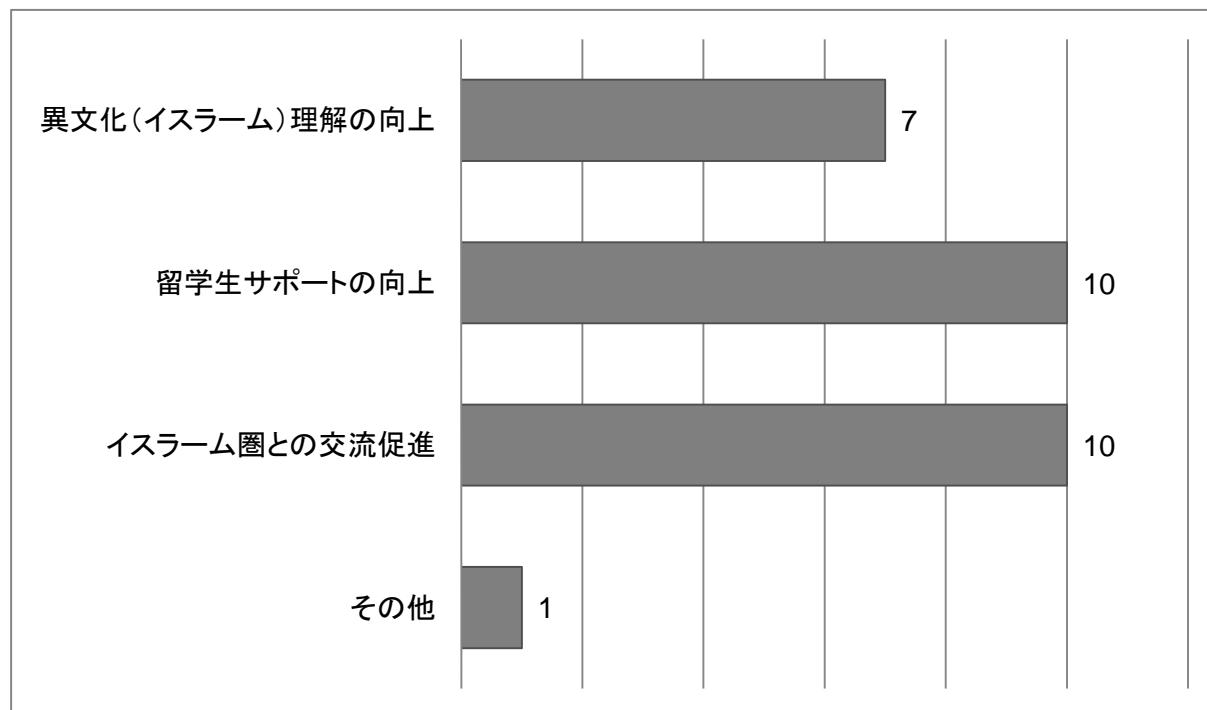


図 1.8 重要と考える理由（宗教的ニーズに対応する意義）：全体（複数回答） n=26

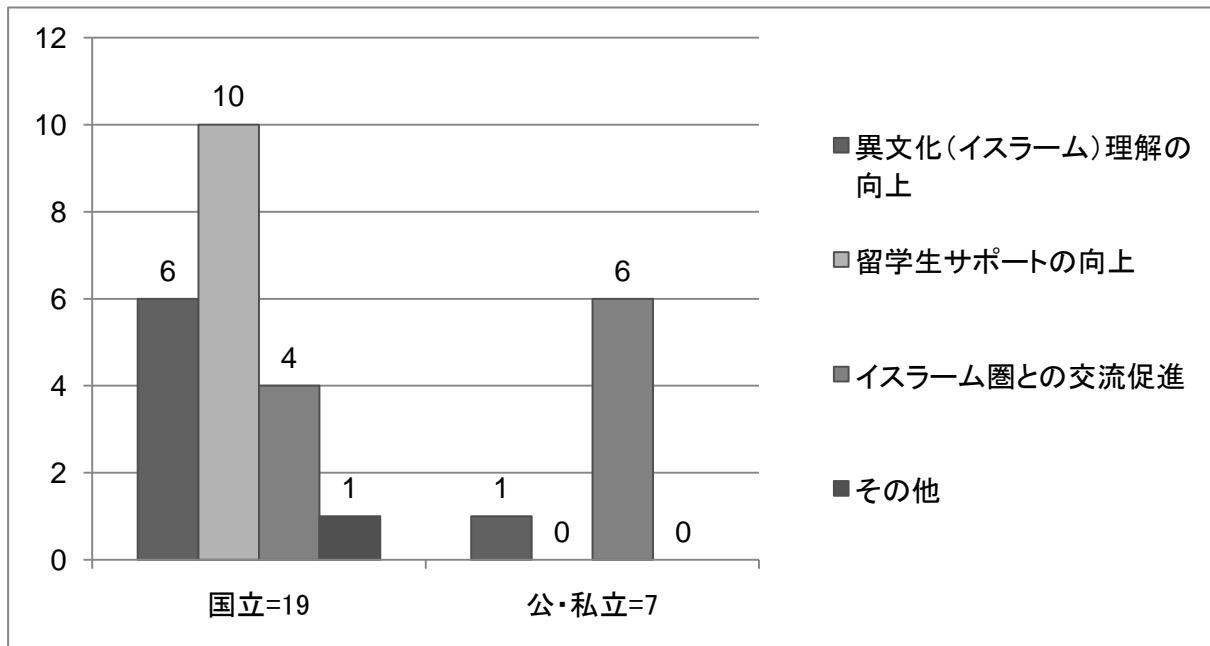


図19 重要と考える理由（宗教的ニーズに対応する意義）：大学設置形態別

図17は、ムスリムの宗教的ニーズへの対応を充実させることが、大学の今後の国際戦略にとって重要なかを尋ねた結果である。全体として、回答者の65%が重要もしくは多少重要と回答した。在籍が集中している国立大学の関係者の方が、重要と考えている割合が高い。公・私立大学で「あまり重要ではない」と回答した大学の中には、まだ数が少なく、現段階では要望も寄せられていないため、という大学も複数含まれる。

「重要」あるいは「多少重要」と答えた回答者には、そう考える理由についても自由記述で回答してもらった。その内容を分類したものが図18である（複数の要素を含むものは重複して分類した）。

「異文化（イスラーム）理解の向上」には、日本人学生や大学の側にとっての意義、相互理解の重要性を上げたものを分類した。原文は以下の通りである。

- ・イスラム文化は日本文化の対極にある、異質な文化であり、どう対応できるかで大学の国際化の度合いが量れる。（つまり、国際化のバロメーター）
- ・イスラーム圏からの学生が多く集まる/欧米系とは異なる文化に対して、日本人学生の理解が深まり、多文化共生のための知識やスキルが蓄積される。
- ・異文化、異宗教理解のため
- ・文化摩擦を回避すべき
- ・日本人学生や教職員に対しての文化的多様性への理解を促すために意味があると考えるため。

- ・この宗教の中心が平和をめざすものであること、他宗教や他文化との交流も視野に入れたものであること、生活形態を規定するものであること、など、非ムスリムが学ぶ点も多く、国際協調を考えるうえでムスリムの存在は大きいと考える。科学技術のとらえ方にもイスラーム圏ならではのものがあるようで、この点も研究者や学生にとっては大きな学びになると思われる。

「留学生サポートの向上」には、ムスリム留学生にとって宗教上の慣習が基本的生活ニーズであることをふまえ、在籍学生のニーズへの対応や学習・研究支援といった、基本的學生サービス・サポートの一環としてとらえている回答を分類した。

- ・大学構成員の様々なニーズへの対応の一環、それによる大学の多文化環境推進の一環として重要と考える。
- ・要望に対応することは重要である。
- ・懇談会、留学生パーティー、見学旅行等での開催日時（ラマダンの関係上）や飲食物への配慮。
- ・本学では全留学生の約3分の1がムスリムということもあり、彼らの日本での生活面および宗教的ニーズへの対応が留学生支援という役割に大きく関わってくると思われる。
- ・留学生の生活基盤が整うことが、研究を行う上でも大切であるため。
- ・多様な宗教に全て対応することは難しいが、本人にとって極めて重要なことなので、出来る限り対応する姿勢が重要である。
- ・但し、留学生自身に解決する力がある。国際化が進み、異文化適応はスムーズにできる段階にある。センターはそれを支援する立場。
- ・国際交流推進を目標に掲げ、留学生の受け入れ数が年々増えている本学にとって、いわば、当然の配慮と思われるため。
- ・在籍留学生の一割弱がムスリムであり、今後もムスリム留学生の割合が増加していくと考えられるから。

「イスラーム圏との交流促進」に分類したのは、イスラーム圏の国々との関係強化、ムスリムを含む多様な留学生の受け入れ拡大に関連した内容を含む回答である。

- ・本学に在籍するムスリム留学生は少なくないので、後に続く留学生へのPRという意味においても重要である。
- ・好むと好まざると拘らずムスリムの学生の受け入れは今後増加させていかねばならないであろうから。
- ・本学の国際戦略の一つに「砂漠化防止」を挙げているが、これに関する国々にはムスリム圏が多く含まれている。また、国際戦略に則って受け入れる留学生・研究者にもムスリム圏からの受け入れが多い。
- ・イスラーム圏を含め、アジアを中心とした諸国から優秀な留学生を受け入れたいと考えているため。
- ・できるだけ多様な国籍の留学生を受け入れたいと考えているので、宗教的配慮は必要。

- ・今後、回教徒の諸国も含めもっと多くの優秀な留学生を、確保するためには、それなりの施設改善を、計らなければならないと思うから。
- ・今後の留学生政策にとってもイスラム圏からの留学生も増加すると思われるため。
- ・マレーシアは本学にとって重要なマーケットであり、又、サウジアラビアの留学生を増やす計画もあり、ムスリムへの対応は重要な課題である。
- ・本学のマレーシア留学生受入れの歴史が古く、今後もマレーシアとの関係を強化する計画があり、ムスリム学生への対応も必要であると考えられる。
- ・多様な留学生を受け入れるため重要である。

その他の回答としては、「宗教の自由を守ることは人権の側面から重要であると考える。」として、宗教的権利保護の側面から「重要」とした回答を1件数えた。

これらの回答を、大学設置形態別に整理したものが図19である。国立大学と公・私立大学との間に、明確な関心の違いが見られた。公・私立大学ではイスラーム圏との交流促進に関心が集中しており、留学生増に向けた戦略的課題としてとらえる大学も少なくない。一方、国立大学にはそうした視点はほとんどなく、在籍する留学生のサポートとして、多様性を尊重／理解する大学全体の環境改善として、この問題をとらえていることがわかる。

今回の訪問調査では、各大学のムスリム留学生会の代表者達とも話す機会を得た。学習・研究する場所の近くに、食事をし、礼拝が出来る場所があることは非常に重要であり、進学する大学を考える際の一つの検討材料となるというのが共通した声であった。それは彼らの生活の基本条件であり、地域にそうした環境がなければ、受け入れ大学に対応が求められることになる。調査からは、各大学関係者が個別に頭を絞り、対応してきている様子がわかった。

しかし、全体には、宗教的権利の保障という概念が弱く、宗教に関わることへの忌避感もかいま見られる。また、ニーズが異なる集団間でただ均等にリソースを分配することは公正とは言えないわけだが、比較的均質で、一律平等的な対応が長くよしとされてきた日本では、異なるニーズをもった存在に異なった対応をすることの正当性、公正さが、理解されにくい環境があることもうかがわれた。しかし、グローバル化、多様化が進む現代社会においては、人権意識の向上はもちろん、多様な集団それぞれの権利やニーズをふまえ、リソースを公正に分配するシステムを備えることが極めて重要である。大学が社会に先駆けてそのような実践をすれば、日本人の学生や教職員、さらには社会全体の意識改革にも貢献しうるだろう。

近年、ムスリム学生会の活動は活発になっており、全国的・国際的な情報交換、連携も進んでいる。今後ムスリム留学生が一層増加してくれれば、大学はより現実的に対応を迫られることになる。第二部に示すオーストラリアの例は、一つの選択肢として参考になるだろう。

第二部 オーストラリアの大学の状況

はじめに

オーストラリアにおいて、海外からの学生獲得及び大学の海外進出の双方を含む国際的な「教育産業」は、多大な経済的利益（2006-07 年度で 117 億ドル）をもたらす「オーストラリア最大のサービス輸出産業」と位置づけられている¹。

オーストラリアには、2008 年現在 44 の高等教育機関があり、その内大学は公設（州立または国立）37 機関、私立 2 機関の計 39 機関である²。2007 年の数値では、オーストラリアの高等教育機関の在籍者数に占める「国際学生」（オーストラリア国内において学生ビザで学ぶ留学生と、オーストラリアの大学の海外キャンパスで学ぶ外国人学生）の割合は、26.5% に達する³。オーストラリア国内において学生ビザで学ぶ者の数では、総数 537,893 人（2008 年 10 月、前年同月から 20.7% 増）の内、高等教育機関在籍者数は 182,656 人になる⁴。その内、83.7% をアジア出身者（国籍別 1 位の中国と 2 位のインドで全体の 43.4%）が占める。南アジア、東南アジア出身の学生に加え、近年中近東からの留学生も急増しており⁵、ムスリム学生も多い。

本調査では、39 大学の内、キリスト教系の 2 大学（州立 1、私立 1）をのぞく 37 大学について、ムスリムが利用可能な礼拝室の設置状況を中心に、各大学の公式ウェブサイトを通じて情報収集を行った。なお、このような調査方法が採られるのは、入学希望者及び在学生向けの情報として、宗教関連施設・サービスについてウェブやパンフレットで案内することが一般的であることを前提としている。2007 年 9 月末～10 月初めには、ウェブの情報から充実した礼拝用施設・設備の設置が確認された大学のうち、7 校のメインキャンパスを 2007 年 9 月末から 10 月上旬にかけて訪問し、礼拝用施設・設備やハラールフードを提供している学内飲食施設の見学、関係教職員やムスリム学生へのインタビューを行った。インタビュー調査を含むより詳細な調査を行ったのは表 1 に示す 6 校である。以降では、これらの調査結果を基にオーストラリアの状況について報告する。

¹ 駐日オーストラリア大使館「オーストラリア概要：観光と留学生」
[<http://www.australia.or.jp/gaiyou/aib/tourism.html>] [2009 年 1 月 20 日]

² Australian Education International (2008) *Country Education Profiles: Australia 2008*, pp.83-84.

³ オーストラリア人（永住者を含む）756,747 人に対し、外国人学生 273,099 人。Commonwealth Government (2008) *Higher Education Report 2007*, p.7.

[http://www.dest.gov.au/sectors/higher_education/publications_resources/profiles/default.htm] [Jan. 20, 2009]

⁴ オーストラリア政府国際教育機構、2008 年 11 月現在。Australian Education International. *Monthly Summary of International Student Enrolment Data -Australia- YTD November 2008*. [<https://aei.gov.au/AEI/MIP/Statistics/StudentEnrolmentAndVisaStatistics/Default.htm>] [Jan. 20, 2009]

⁵ オーストラリア政府国際教育機構前掲資料によれば、2008 年 10 月の留学生総数でみて、サウジ・アラビア人が前年同月比 114.5% 増、モーリタリア人が同 67.9% 増。

表1 オーストラリア事例紹介大学一覧

大学名	所在地	設立	学生数**	国際学生数**	ムスリム学生数***
クイーンズランド大学*	クイーンズランド州	1909	37,518 (2006)	6,607 (2006)	約 750 人
南クイーンズランド大学	クイーンズランド州	1996	25,868 (2006)	9000 (2006)	50-60 人
シドニー大学*	ニューサウスウェールズ州	1851	45,039 (2006)	8,687 (2006)	約 300 人(ムスリム学生組織メンバー)
ニューサウスウェールズ大学*	ニューサウスウェールズ州	1949	約 40,000	約 7000	400-500 人(ムスリム学生組織メンバー)
モナシュ大学*	ビクトリア州	1958	約 46,000	約 9000	約 400 人(金曜礼拝参加者)
メルボルン大学*	ビクトリア州	1853	約 36,000	約 5000	約 400 人(金曜礼拝参加者)

*国の研究重点 8 大学 (Group of Eight) に属する大学

**大学ウェブサイト等で公開されている情報に基づく。

***ムスリム学生数は正式な統計がないため、各大学の関係者より聴取・入手した情報・資料に基づく参考値。金曜礼拝（金曜日の礼拝は、男性信者は集団で行うことが義務づけられている）参加者数やムスリム学生組織会員数で示している場合、実数はさらに多くなることが予測される。

1. グローバルな「学生市場」におけるムスリム留学生への関心の高まり

毎年アメリカで開催される、世界最大の国際教育見本市とも言える NAFSA (National Association for International Educators) の 2008 年大会では、アメリカ、カナダ、イギリスなど、英語圏諸国の大が中東からの学生獲得や受入れ環境整備のノウハウを得ようと積極的に議論に参加している様子が見られた。セッションの数としては、200 を超えるセッション中、中東出身留学生の獲得や文化理解に関するセッションが、2007 年の 4 件 (1.9%) から 2008 年には 13 件 (6.3%) へと急増している。また、内容的にも、2007 年度には学生のリクルートに関する報告が多く、サポート関連は 4 件中 1 件のみであったのが、2008 年度にはサポートや文化理解に関するセッションが 5 件確認された。学内や地域のイスラーム文化理解を促進するためのプログラムを、州政府等の助成を受けて大学が展開している事例の報告もあり、大学と地域が連携して環境整備を進めようとする動きが見られるようになっている。

このような動きを大きく後押ししているのは、サウジ・アラビア政府派遣留学生（2006～）等、産油国が奨学金付で大量に送り出す留学生達である。オーストラリア訪問時にお

いても、サウジ・アラビア政府派遣留学生がオーストラリアには今度何千人やってくるといった話題が、複数の大学の関係者から聞かれた。

2. オーストラリアの大学における宗教関連学生サービスの全国的状況

非宗教系の37大学（公設36大学、私立1大学）のうち、ムスリム学生向けに礼拝施設の情報がウェブで提供されていたのは33大学であった。そのうち31大学については、ムスリム専用礼拝室の設置が確認された。従って、ムスリム学生に対し、専用礼拝施設を提供することはかなり一般化していると言える。東南アジア地域のイスラーム諸国と近接するオーストラリアにおいては、ムスリム学生の存在は新しいことではない。例えば、筆者が把握している範囲で、古くは1960年代にムスリム学生組織が設立されている（ニューサウスウェールズ大学、1969年）。しかし、2000年代に入って新設・拡充している大学が多く見られることから、全国的、一般的には、近年拡充傾向にあることがうかがわれる。

こうした傾向には、先に示したムスリム留学生獲得戦略が少なからず影響していると考えられる。入学希望者や新入生向けの大学案内の項目として、大学における礼拝やハラールフード入手環境が紹介されるのはもはや標準的であり、ムスリム学生向けに単独のガイドブックを発行している事例も珍しくない（ウーロンゴン大学「UOW Islamic Directory」、モナシュ大学「Salaam Monash」、RMIT大学「RMIT Muslim Students Handbook: Salaam RMIT」、ディーキン大学「Islamic Directory」、クイーンズランド大学「Handbook for Muslim Students」など。多くはPDFファイルで大学のウェブサイトから入手可能）。大学発行のガイドとはいえ、学内の関連組織、礼拝施設やハラールフード提供飲食施設の他、近隣地域のモスク、ハラールフード・レストランや食料品店、医療機関、衣料品店、ムスリム関係団体等の情報を網羅する。

大学ではなく、自治体がムスリム留学生向けにガイドを発行する例も出てきている。例えば南オーストラリア州アデレード市の「Muslim students' Guide to Adelaide」では、州知事とアデレード市モスクの代表者の歓迎メッセージが冒頭を飾り、ムスリム学生にとって、地域が、地域の諸大学が、どれだけ良い環境を提供しているかが紹介されている。

オーストラリア社会全般としては、シドニー南部において、5千人の白人の若者がアラブ系の若者を襲撃したクロヌラビーチ暴動（2005）に代表されるように、アラブ系やムスリムに対する偏見は決して少なくない。ムスリム学生への対応に積極的な大学が位置する市町村においても、一歩地域に出れば、中近東諸国からの移民や難民⁶は多くの困難に直面している。同じアラブ系、あるいはムスリムといえども、大学の内と外では環境に大きな

⁶ オーストラリア移民・市民権局のデータによれば、2005-2006年における難民としてのオーストラリア入国者数では、出身国別で、上位3位であるスーダン（3,591人）、イラク（1,850人）、アフガニスタン（1,508人）をはじめ、イスラーム諸国からの難民が多くを占める。宗教別に見ても、ムスリムが3,376人（28%）と、キリスト教徒について第2位を占めている。

違いがある。大学で発生したムスリム歓迎ムードは、社会全体への何らかの波及効果を持ちえるだろうか。留学生獲得という大学の経営戦略が牽引役となり、大学、さらには社会の人種・文化的偏見の改善という「副産物」をもたらす可能性はあるだろうか。

以降では、礼拝用施設・設備の提供形態を中心に、オーストラリアの大学における取り組みについて、事例を通じて具体的に紹介していく。

3. 学内礼拝施設・設備と宗教者によるサービスの実際

ムスリム学生が礼拝に利用できる大学の施設・設備には、大きく以下のようなタイプがある。①～④は日常的な礼拝に供され、1キャンパス内に併存してあることが少なくない。⑤は、それらとは別に、特に大人数が集まる場合に別途利用されるものである。

- ①多信仰の宗教センター
- ②独立したムスリム専用礼拝施設
- ③棟内の一画に設けられたムスリム専用の礼拝室
- ④宗教不特定の共用礼拝室（図書館等の一画の小部屋等）
- ⑤一般会議室の一時利用（大規模な宗教行事の際など）

3-1. 多信仰の宗教センターとムスリム・チャップレン

オーストラリアの大学において、大学が宗教者を学内に配置し、学生の面談希望に対応するサービス（Chaplaincy Service）を提供することは珍しくない。北米やイギリスでも広く見られるものである。従来キリスト教を中心としていたが多宗教化し、近年ではイスラームの宗教指導者も配置されるようになっている。こうした、大学の認可を受けて学生への宗教サービスに携わる宗教者は、キャンパス・チャップレン（campus chaplain）とよばれる。キャンパス・チャップレンは大学の承認を受け、IDカードも発行されるが、給与をもらうことはなく、地域の教会や宗教組織からの派遣、あるいは実質的にボランティアとしてその任についている場合が多い。大学は人件費以外、センターの施設・設備とその維持・修繕費、光熱水道費等を負担する。

今回の調査対象校において、そのような多様な宗教・教派の宗教サービスを提供・保全するセンターを有する大学としては、クイーンズランド大学、シドニー大学（以上2校チャップランシー・センター）、モナシュ大学（宗教センター）が該当する。その内、多数のキャンパス・チャップレンを有する前2校においては、チャップレンから直接話を聞いた。

(1) クイーンズランド大学

クイーンズランド大学は多信仰のチャップランシー・サービス（Multi-Faith Chaplaincy

Service) を提供している⁷。セント・ルシア・キャンパスにあるチャップランシー・センターを訪ねた。チャップランシー・サービス自体は古くからあったが、センターが出来たのは 1982 年。プレハブ平屋 1 戸建てのセンターは、会議室、チャペル、一種の「瞑想室」、チャップレン用のオフィス教室、センターが運営する中学生と現地学生の交流プログラムのオフィスとラウンジ、キッチンからなる。「瞑想室」は、ただ部屋に椅子が置かれているだけの何もない部屋で、ただ静かな時間を持ちたい学生がやってきてしばらく過ごしたりすることができる。ムスリムの女子学生が利用していることもあるとのことだった。

2007 年 10 月現在で、セント・ルシアのセンターには、イスラーム 2 人、仏教 1 人、ユダヤ教 1 人、キリスト教各教派 7 人の、11 人のチャップレンが所属している。各チャップレンの写真は入り口のボードに張り出されており、チャップレンの名前、宗教・宗派名、面談対応曜日が添えられている。面談可能日は毎日から週 1 回まで、各チャップレンによって異なる。とはいえ、学生の希望次第という面も大きい。他のキャンパスにも、5 人のチャップレンがいるとのことであった。イスラーム指導者（イマーム）については、それ以前から学生の希望に応じて来てもらうことはあったが、キャンパス・チャップレンとして加わったのは、1 人が 2005 年、もう 1 人が 2006 年のことである。大学ウェブサイトに履歴等紹介されているが⁸、インドとパキスタン出身で、彼ら自身いろいろな国での経験を有する。



クイーンズランド大学 チャップランシー・センター外観

⁷ [<http://www.uq.edu.au/chaplaincy/index.html>] (2009 年 2 月 16 日)

⁸ [<http://www.uq.edu.au/chaplaincy/index.html?page=35126&pid=32905>] (2009 年 2 月 16 日)

(2) シドニー大学

シドニー大学 Multifaith Chaplaincy Center は、プレハブ平屋一戸建てで、チャップレン用のオフィス数室、キッチンからなる。センター入り口には、イスラーム 1 人、仏教 1 人、ユダヤ教 1 人、キリスト教各派 9 人の、12 人のチャップレンの写真が張り出されている。ムスリムのチャップレンとしては、2001 年から、レバノン出身のイマームが、ボランティアで加わっている。センター内に礼拝室はない。ムスリム用の礼拝室（後述）と、チャップレンが学生との面談や学習会等に使用する部屋は別棟に設けられている。シドニー大学のイマームの場合、ムスリム学生に対するカウンセリング的な行為も行っているとのことであった。留学生サポート組織の責任者（カウンセラー）からも話を聞いたが、アジア圏など、カウンセリングを受けることが一般的でない国・地域からの留学生の場合、大学の留学生サービス組織のカウンセラーに相談するよりもチャップレンを好むケースがあるといい、精神医学的な専門性について担保しながら、チャップレンと連携・役割分担していくことが必要だと語っていた。



シドニー大学 マルチフェイス・チャップランシー・センター外観

(3) モナシュ大学

モナシュ大学クレイトン・キャンパスにある宗教センター（Religious Center）は、多信仰の宗教センターとして歴史があり、よく知られている（1968 年設立）。特に受け付けや管理人の姿もなく、センター内の施設は個人やグループで学生が随时利用できる（イベントのみ申請制）。チャップレンもキャンパスに駐在はしていない。コミュニティ・サービスの

一環としてチャップランシー・サービスは提供されるが、訪問の時点では、ムスリムについては行われていなかった。

センターは円形で、中央に円形の大型ホールがあり、その周囲を小部屋が取り囲む。そのうち、大型ホール正面奥の比較的大きなスペースを占めるのがキリスト教のチャペルとなつており、ムスリム用にも、ムスリム学生組織 (Monash University Islamic Society: MUIS) 管理で、男女別の礼拝室と、隣接して洗浄設備付きトイレが設けられている。同キャンパスではほかに、一戸建てのムスリム用礼拝施設（後述）と留学生寮内の礼拝室も利用できる。MUIS 中心メンバーの一人であるスリランカ人留学生によれば、広大なキャンパスのエリアや礼拝の性格に応じ、学生達は各施設を使い分けているとのことであった。



上：モナシュ大学 宗教センター外観

左：男性用礼拝室入口、下：男性用足洗い場





ムスリム女性用礼拝室室内 コーランやスカーフ類が置かれている

3-2. 独立施設の事例

(1) 南クイーンズランド大学



南クイーンズランド大学 イスラミック・センター外観

公園都市として知られるクイーンズランド州トゥーンバ市に、南クイーンズランド大学はある。留学生の多さでも知られるが、全学生の3分の2は遠隔地で教育を受けており、キャンパスで学ぶ学生の数はそう多くない。自然豊かで静かな環境の中、アットホームな雰囲気が漂う。学内7部局の要請に基づき、イスラミックセンターが設立されたのは2000年のことである。今回の調査では、センターの運営責任者であるS.カーン准教授から話を聞くことができた。カーン氏は、センターの立ち上げから設立後の日常的な管理運営において、また大学とコミュニティの橋渡し役としても重要な役割を果たしている。

ムスリム学生の数は1990年代から徐々に増え、センターが設立時点で50人に達したことである。それでも今回調査した他大学に比べればぐっと小規模だが、施設・設備面では極めてよい環境が提供されている。センターはメッカの方向に向かって正確に建てられ、礼拝スペースも今回訪問した施設中で最も広い。後部には、カーテンで区切れる4畳半程度の女性用スペースもあり、床にはサウジ・アラビア人からの寄付による真新しいモスク用絨毯が敷かれていた（写真）。洗浄設備も整っている（下の写真是女性用）。センター設立にあたっては、ムスリム学生に対する大学の魅力向上も意識されたという。ムスリム留学生の出身国としては、当初インドネシア、マレーシアが多かったが、最近ではサウジ・アラビアが最多となっている（留学生全体としてもサウジ・アラビアが最多で、中国、インドが続く）。

施設及び光熱費はすべて大学の費用でまかなわれ、日常的には大学の学生や教職員の礼拝に利用されているが、地域のセンターとして位置づけられている点に特徴がある。地域としてのムスリム人口は250～300人になるが、地域のモスクはない。ムスリム組織も大学固有ではなく地域ベースの組織「Islamic Society of Toowoomba: IST」に一本化されており、ISTがセンターの運営を担う。地域ベースの活動にすることは、留学生の適応にも良い影響を与えているとカーン氏は考えている。留学初期にカルチャーショックに陥った場合も、センターの活動に参加し、地域のムスリムと交流することで、コミュニティに歓迎されていると感じられる、それがとても重要なことであ



った。

センターは、地域におけるイスラーム理解を促進するための活動も行っている。年1回開催される「オープン・デイ」には、非ムスリム住民も招いて食事や飲み物を提供し、講演等を行っており、この活動にはクイーンズランド州政府の地域活動のための助成金が提供されている。

(2) クイーンズランド大学



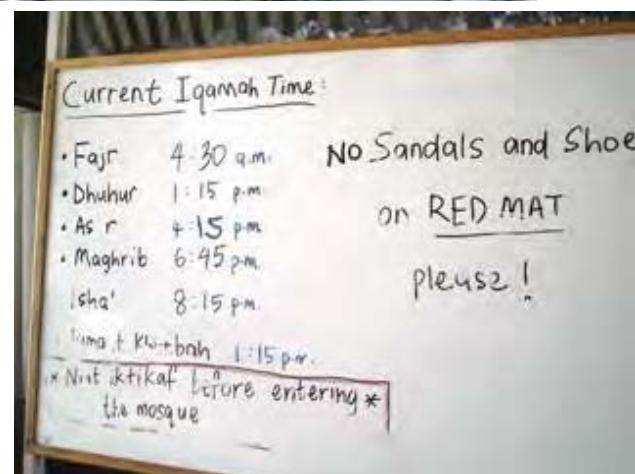
クイーンズランド大学セント・ルシア・キャンパス モスク外観

第2章で示したムスリム学生向けハンドブック 「Handbook for Muslim Students」 2007年版によれば、クイーンズランド大学セント・ルシア・キャンパスのムスリム学生数は約750人である。金曜礼拝に集まるのは350~400人くらいとのことだったが、金曜礼拝はユニオンビル内の一室を予約して行われており、専用施設である「Musolla」は、日常的な礼拝に主に使われる。この施設は、クイーンズランド大学のムスリム学生組織「Muslim Association of University of Queensland: MSA-UQ」（1978年発足）に対し提供されたもので、大学の敷地外ではあるが隣接し、クイーンズランド大学バス停からすぐの一軒家である。チャップレンシー・センターの責任者によれば、当時の大学役員の判断としてかなり古くから提供されているものだが、経営陣が変わればどうなるかわからないし、今後再開発等で取り壊された場合、同様の施設が再び提供されるかはわからないとのことであった。

(3) モナシュ大学



上：モナシュ大学 モスク外観
右：入り口のメッセージボード
右下：男性用洗浄設備
下：モスク室内



前出の宗教センターが広大なクレイトン・キャンパスの中心部にあったのに対し、モスクはキャンパスの西側周縁部に位置する、白い木造平屋の一戸建てである。モスク管理委員会メンバーの M.モヒディーン（Mohamed Mohideen）講師によれば、この施設は 1994 年に大学によって開設された。1980 年代に入ってムスリムの学生が増加し、宗教センターの礼拝室では手狭になり、多くの学生が礼拝場所を探す状況が生まれたため、当時の副学長に要望して実現したことである。ムスリム学生の数はその後も増加し、マレーシア人学生を最多として、35 カ国、1000 人以上になっているという。

モスクのキャンパス側の入り口（男性用）に配されたホワイト・ボード（前ページ写真）には、礼拝時間や注意書きが随時書き込まれている。内部は、女性用入り口となっている正面玄関（前ページ写真）周辺の、女性用の礼拝室及び洗浄スペース以外は仕切りがない。イマーム用の席も用意されており、金曜礼拝には参加者の寄付金で地域から呼んでいるとのことであった。モスクは 24 時間利用可能で地域住民にも開放されており、金曜礼拝には約 400 人が集まるという。特別な宗教行事の時には 800 人以上が集まるため、グラウンド等屋外も利用される。

モナシュ大学のムスリム学生組織「Monash University Islamic Society: MUIS」（1980 年代初めに発足、会員約 300 名）の委員会メンバーとして、人種も出身国も多様な、留学生を含む 4 名の代表者と話すこともできた。モナシュのムスリム・コミュニティには共同体意識が強く、深夜の礼拝に集まり、午前 2 時半に一緒に食事をしたりもしているという。モナシュ大学の環境については、大学教職員との関係もよく、どの人種・文化集団に対しても差別がないとの発言も聞かれた。イスラームの重要な宗教行事と試験日が重なった時に、試験日を変えてくれたこともあったそうであるが、それがムスリムへの特別な対応という認識はなく、同様のことがあればどの集団に対してもモナシュのスタッフはそうするだろうと語っていた。

3-3. 一般棟内に設けられた礼拝施設の事例

（1）シドニー大学

シドニー大学には 1970 年代設立のムスリム学生組織（SUMSA: Sydney University Muslim Students Association、会員約 300 人）があり、ユニオン棟内にその団体が有する部屋が、以前は礼拝にも使用してきた。旧教育学部棟 3 階の空き教室を利用して、男女各 1 室のムスリム用礼拝室が設けられたのは 2003 年のことである。建物の案内板で、*Islamic Prayer Room* の標記はすぐに見つかる。並びで男女それぞれの礼拝室があり、廊下にはベンチと靴を入れる棚、掲示板も設けられている。洗浄施設は簡易版で、廊下を挟んで向かい側のトイレの手洗い場のシンクを、足も洗いやすいよう低い位置に動かすことで対応している（次ページ写真参照）。廊下の奥にはキッチンもある。

男女の礼拝室は同サイズで、アコーディオンカーテンで中間が仕切られている。休み時

間や授業の空き時間等を利用しての日常礼拝では、男性は常時 10 名前後、女性は 2~3 名が利用しているようであった。200~300 人が集まる金曜礼拝では、仕切りを開いて男性がすべてを使うが、それでも入りきらず、廊下にも人があふれる状態だという。

礼拝室の運営にあたってはムスリムと非ムスリム、教職員・学生・チャプレンが加わった委員会（Islamic Prayer Room Advisory Group）が設けられており、定期的に会合を開いて協議し、関係者間の意思疎通が図られている。



上：シドニー大学旧教育学部棟外観
下 2 枚：女性用礼拝室室内（入り口にベールがかけてある。）



シンクが低い位置にされた女性用トイレの手洗い場



(2) ニューサウスウェールズ大学

ニューサウスウェールズ大学のムスリム用礼拝施設は、キャンパス北東部の Square House の 3 階にある。大学中心部から離れているため人通りは少ない。

3 階には複数の学生組織用スペースが混在しており、一画がムスリム用となっている。礼拝室は、3 曜程度の女性用の部屋と、ドアを隔てて 20 曜ほどはありそうな男性用の部屋から成る。女性用の部屋にはベール等を入れた棚も置かれていた。

礼拝室に隣接し、男性用には 2005 年に本格的な洗浄設備が設けられた（女性用は通常のトイレに一人分の簡易スペース）。同じフロアにオフィスを構え、チャップレンも兼ねるムスリム教員によれば、この洗浄設備を新設するための大学側との交渉には 2 年ほどかかったという。以前は女性用と同様の、トイレの一画に設備がある形態だったため、床がぬれて滑るなどいろいろ問題があったとのことだった。

同大のムスリム人口は、話を聞いた学生によれば 1000 人はいるのではないかと言っていたが、学生組織（Islamic Society on Campus: ISOC, 1969 年発足）の会員数は 400～500 人とのことだった。筆者が訪ねた夕刻には、礼拝室には男女それぞれ 2～3 名の出入りがあったが、1 日当たり、男性 100 人、女性 20～30 人程度が入れ替わり礼拝にやってくるという。キャンパスが広いため、離れたエリアにいるときは空き教室で礼拝することもあるが、昼の礼拝時には部屋が一杯になるほど集まることもあるそうで、特に金曜礼拝には 400～500 人が集まるため、別に大型ホールを借りて行っているとのことだった。学内には他にも仏教等の宗教ベースの学生組織があり、共同でイベントを行うこともあるという。



Square House 外観



女性用礼拝室内（礼拝の方向が貼紙で示されている）

洗浄設備
右が男性用
左が女性用



(3) メルボルン大学

メルボルン大学のムスリム学生組織(Melbourne University Islamic Society: MUIS)は、1990年代半ばの発足と比較的新しい。組織の委員会メンバーである女子学生によれば、メンバーは約300人で、その半数が留学生だという(最多はマレーシア人)。学生向けの売店なども入ったFrank Tate Buildingの一角落が、ムスリム用礼拝室としてMUISに提供されるようになったのは、2000年とのことだった。大学ウェブサイトの1項目「学生サービス:文化的多様性のサポート」には、入学、就職支援、カウンセリングなどと並んで礼拝施設の項目がたてられ、このセンターの所在が案内されているが、実際、学生が自由に入り出すラウンジのようなスペースの奥の扉を抜けたところにあり、知らなければたどり着くことは難しい。この施設は、2007年10月、筆者の訪問期間中にビルの建てかえのため閉鎖されたが、当時の状況を紹介することにする⁹。



Frank Tate Building 外観



女性用礼拝室入口



女性用洗浄設備



女性用礼拝室内

⁹ 新規建設中の建物内に礼拝室を設置予定と大学側からMUISに説明があったが、詳細は明らかではない。図書館には小さな無宗派の礼拝用スペースがあるが、5人程度までが限界のため、MUISは、日常礼拝用の仮施設と、金曜礼拝にはスポーツ・センターのスタジアムが利用できるように手配した。2009年2月現在、大学ウェブサイトの情報では、新たな固定スペースはまだ提供されていないようである。

礼拝室内への立ち入りはアクセス・キーで管理されており、ナンバーを知っている者だけが入室可能になっている。番号は、MUIS メンバーから入手する。礼拝室の向かいのトイレには本格的な洗浄設備が設けられている。奥にはキッチンもある。キャンパス内には別に無宗派の小規模な礼拝室が図書館内にあるほか、近接する RMIT 大学の礼拝施設との行き来もあり、ムスリム学生達は位置や状況に応じて各施設を使っているようだった。

礼拝室は半円形で、半分に仕切られ、男女それぞれに割り当てられている。しかし、金曜礼拝の時は仕切りがあけられ、男性が全室を使う。女性用の部屋の中央と、入り口付近にカーテンが引けるようになっており、集まった男性の人数に合わせてカーテンを引き、残りのエリアを女性が使えるようにしている。足りない場合は、普段物入れになっている小部屋を片付けて女性用礼拝室にすることもある。

女性用礼拝室内には常に 10 数人の学生がおり、礼拝するだけでなく、自習したり、おしゃべりしたりしている。入れ替わり人がやってきて、幅広い国籍・人種・分野の学生の出会いと交流、情報交換の場となっていることがわかる。室内には本棚や戸棚があり、戸棚には、各国・地域特有の多様なベールが用意されている。日常ベールをしていない学生の場合、部屋にやってきて荷物を置き、洗浄をすませてからまた入室し、それぞれの様式で髪を覆って礼拝に備えるという光景が見られる。

金曜礼拝には地域からイマームに来てもらっている。金曜礼拝には、スタッフや地域住民も含め 400 人ほども集まる。女性にとっては義務ではないが、筆者が見学した際には、物入れの小部屋の中に、初めての人、久しぶりの人、いつもの人おりませ 20 人以上がぎっしりと入り、ベールのスタイル、礼拝の仕方も様々に、1 時間弱の礼拝をしていた。

MUIS では、イスラームへの理解を広めるため、パンフレット類の他、料理やプレゼント（スカーフ等）も用意した、非ムスリム学生を招いての独自の交流イベントも開催している。大学の留学生会と連携し、大学全体の文化交流行事にグループとして参加することもある。これら活動資金は、メンバーによる寄付、学生ユニオンからの交付金（メンバー数換算のため、MUIS にはまとまった金額が交付されている）によってまかなわれている。

4. 学内食堂におけるハラールフードの提供事例

ハラールフードを提供するカフェテリアが学内にあることは、珍しいことではなくなっている。ウェブや冊子による大学の学生サービス案内にも書かれていることが多い。ここでは、詳細に話を聞くことができたモナシュ大学の事例を紹介する。

モナシュ大学、キャンパス・センター1 階にあるカフェテリアでは、2 ケース分がハラールフードのセクションになっている。カレー、中華、イタリアンなど様々なメニューがあり、アラビア文字のステッカーに気づかなければ、特にムスリム向けと意識することはないだろう。このカフェのチーフによれば、学生のリクエストに応じ、2002 年よりセミ・ハラールの提供を始め、2005 年から材料・調理法すべてにおいて本格的なハラールフードメ

ニューを導入したという。コストは高いが提供価格は同レベルに設定しているそうで、ムスリムでない学生も知らずに食べているとのことだった。ムスリムには食べられない物があるが、非ムスリムはハラールフードを食べられる、つまり、ハラールは誰でも食べられる食事なのだという説明があった。このような店舗側の理解や対応のスムーズさには、カフェの経営者自身がムスリムで、もとより理解とノウハウがあったことも影響しているようだ。調理担当者のうち2名がムスリムで、その2名が専属で調理しているとのことだった。調理担当者、調理スペース、食材を運ぶコンテナ、調理器具、仕上がった料理を入れるコンテナ、すべてを区別し、混ざらないようにする必要があるが、最初は面倒に思うことがあっても、システム化されてしまえば難しいことではないという。



カフェのハラールフード・ケース（ハラールフード用の調理道具はすべて赤、他の物は黒で区別され、料理用コンテナにも Halal と書かれている）

さらに一步進めて、学生寮に隣接するカフェ（右写真）では、2007年から提供メニューをすべてハラールにしてしまった。寮には留学生が多く、ムスリムも多いことがあるが、まさに、ハラールフードは誰でも食べられるが逆はない、ということを実践していると言えよう。





全メニューがハラールの食堂のメニュー

5. 大学が宗教的サービスを提供することの意義

オーストラリアの大学が、礼拝施設・設備を設けたり、ハラール・メニューを提供したり、ムスリム宗教指導者を駐在させたり、地域情報まで網羅したムスリム向け情報冊子を作成・発行したりする理由は何か。一つには、大学が抱えるムスリム人口が格段に多く、礼拝場所を探して学内をさまよわれたり、情報を求める学生に個別に対応したりするよりも、効率的・合理的という面があるだろう。

しかし、そうした選択肢がさほど抵抗なく受け入れられる背景としては、権利やニーズの尊重ということが、社会的により根付いているということがあげられる。まず、宗教的権利についても、伝統的に、キリスト教社会として宗教活動を行うこと自体への違和感が少なく、その権利・ニーズの尊重が社会的に根付いている。社会全体としてはイスラームへの偏見がないわけではないが、少なくとも大学では、特定の宗教を排除するような環境はないようだ。ムスリム専用の礼拝施設の設置にしても、ある集団を特別扱いしているというよりは、日中学内で礼拝する必要性・ニーズを持つ人々に対して配慮しているという理解が成り立つ。また、オーストラリアでは元来学生団体の活動が活発で、学生の権利も格段に保護されている。政府からの交付金が削られ、経営の自立化が強力に推し進められているオーストラリアの大学にとって、「教育サービス」の消費者たる学生の権利やニーズに敏感になることは、学生獲得競争が激化する中では当然の姿勢と言えよう。加えて、ムスリム学生の半数以上を占めるという留学生は、国内学生よりかなり高額に設定された学

費を納入してくれる重要な「顧客」である。多くを支払っているのだから、それに見合ったサービスを受け取る権利がある、という言い方も、複数の大学関係者から聞かれた。

その「顧客」をいかに取りこぼさないかも、重要な経営的関心となる。例えば、シドニー大学の担当者は、近年オーストラリアのいくつかの大学で進められた人員削減について、次のように語っていた。

「国際課スタッフの人員削減は大きな間違い。留学生は増えていて、そこから多くの収入を得ている。スタッフが足りず留学希望者からの問い合わせに対応できなければ、そこで（本来獲得できていた）学生を失うかもしれない。」

南クイーンランドの大学ように、まだ比較的在籍数が少ない大学も、ムスリム留学生獲得をねらった投資として、礼拝施設・設備を充実させてきている。今回話を聞くことのできたムスリムの教員やチャプレン、学生たちはおしなべて、礼拝や教義に則った食生活ができる環境があるかどうかは、留学先選びに影響すると語っていた。南クイーンランド大学のカーン氏は、大学のウェブサイトにムスリム関係のコンタクト・パーソンとして掲載されているが、子どもを海外留学させようと考えている親から、礼拝施設の有無やハラールフード入手の可否について問い合わせを受けるという。

留学生獲得戦略の中でも近年注目を集めているのが、中近東諸国からの政府派遣留学生である。しかし、この留学生達は大学にとってまとまった収入源となる一方、多くのケアを要請する存在もあるという。文化や生活スタイル、社会的価値の違いが大きいことから、オーストラリアに来てからのカルチャーショックが特に大きく、結果的に、オーストラリアの人や社会を嫌悪したり、蔑視したりするようなケースもあるという。留学生が陥りやすいこのような問題については、従来からの西洋的なカウンセリングよりも、宗教指導者による支援が機能する場合もある。学生が持ち込む文化や価値と、ホスト社会の文化や価値とを橋渡しし、折り合いをつける手助けを、（自身も移民であることが多い）ムスリムの教員やチャプレンがしている状況が見られた。本文中紹介した以外にも、例えばメルボルン大学でも、文化的に多様な学生へのサービスとして、「カウンセリングとしてのチャップランシー」が位置づけられるようになっている¹⁰。留学生のホスト社会への適応、人間関係づくりには、礼拝場所で形成される出会いや交流が果たす役割も大きい。ムスリム学生組織等の活動も、学生が孤立するのを防ぐ重要なネットワークとなっている。学生の多様性が増す中で、サポートの方法やリソースにも、より一層の多元化、連携が求められるということだろう。

¹⁰ メルボルン大学ウェブサイトでは、“Chaplaincy offers a service of listening and counselling”と説明されている。[<http://www.unimelb.edu.au/diversity/supporting/services.html#chaplains>] (2008年2月25日)

「留学生の宗教的多様性への対応に関する調査」 へのご協力をお願いいたします。

2007年11月28日

金沢大学大学院自然科学研究科

講師（留学生専門教育教員）

岸田 由美

本調査は、科学研究費補助金（若手研究（B））「留学生の宗教的多様性への対応に関する調査研究—イスラム教徒の事例を通して—」（研究代表者：岸田由美）の研究の一環として、留学生を一定数以上受入れている日本の大学約150校を対象として行うものです。

高等教育のグローバル化、さらに、東南・南・中央アジアからの留学生招致が政策的に推進される状況のなかで、イスラム教徒の留学生増が見込まれます。しかし、イスラム教徒として義務づけられた1日5回の礼拝と戒律に沿った食事の摂取を、日本の大学で実践していくことは、決して容易ではありません。この調査は、日本の大学におけるムスリム学生の宗教的ニーズへの対応の現状を明らかにし、先進的な事例を共有化することで、今後の改善に役立てることを目的としています。次ページからの質問項目へのご回答に、是非ご協力下さい。また、貴大学において、質問事項に関連してすでにまとめられた資料等ございましたら、別添でお送りいただけましたら幸いです。

なお、調査結果につきましては、参考事例として取り上げるオーストラリアの大学を対象とした調査の結果とあわせ、2008年度末までに報告書として刊行し、ご回答いただいた皆様にお贈り申し上げる予定です。

ご多忙の所恐縮ですが、ご回答いただきました調査用紙は、同封の返信用封筒に封入の上、
12月21日（金）までにご投函下さい。

本調査に関する問い合わせ先

岸田 由美
〒920-1192 石川県金沢市角間町
金沢大学自然科学研究科（工）
Phone/Fax: 076-234-4936
E-mail: kishida@t.kanazawa-u.ac.jp

大学について

1. 大学名 ()
2. 大学名の公開可否についていずれかを選んで下さい。
 - 1) 公開可
 - 2) 公開不可
 - 3) 個別に確認してほしい

* 「公開可」とお答えいただいた場合、先進事例の紹介などの形で、報告書において大学名を表示して紹介させていただく場合がございます。

ご回答者について

3. お名前 ()
 4. 所属組織 ()
 5. 職責
 - 1) 留学生センター教員または部局の留学生担当教員
 - 2) 留学生担当事務職員
 - 3) その他教員（留学生との関係：）
 - 4) その他事務職員（留学生との関係：）
 6. 連絡先電話番号 ()
 7. 電子メールアドレス ()
- * ご回答内容についてより詳細にうかがいたい場合に、連絡を差し上げことがあります。この情報を他の目的に利用すること、公開することは一切ありません。

大学の留学生受入れ政策について

8. 貴大学についてあてはまる選択肢をいくつでも選んで下さい。
 - 1) 海外事務所がある（国名：）
 - 2) 海外キャンパスがある（国名：）
 - 3) 優秀な人材を獲得するため海外からの学生募集に力を入れている
 - 4) 学生数確保のため海外からの学生募集に力を入れている
 - 5) 留学生的学習環境改善には積極的に取り組んでいる
 - 6) イスラム圏からの留学生受入れプログラムを展開している（政府派遣等）
9. イスラム圏との教育・研究交流の推進に向け、貴大学が取り組んでいらっしゃる事業がありましたらご紹介下さい。



貴大学におけるムスリム留学生の在籍状況及び宗教的ニーズへの対応について

10. イスラム教徒である留学生（以下「ムスリム留学生」）の在籍状況についてわかる範囲でお答え下さい。

- 1) 在籍していないと思う → [質問は以上です。回答用紙をご返送下さい]
- 2) 在籍しているが 10 人未満だと思う 3) 10 人以上在籍している
- 4) 20 人以上在籍している 5) 30 人以上在籍している
- 6) 50 人以上在籍している 7) 100 人以上在籍している
- 8) 150 人以上在籍している 9) その他（具体的に _____人程度）

11. 大学の周辺環境についてあてはまる選択肢をいくつでも選んで下さい。

- 1) 留学生以外にも外国人を見かけることが多い
- 2) 市内で服装や風貌から明らかにイスラム教徒とわかる人を見かけることがある
- 3) ハラール・フード（イスラム教の戒律に則った食品）のレストランや食材店がある
- 4) 地域にイスラム教のモスクがある

12. ムスリム留学生に関わる学生組織がありますか？（複数回答可）

- 1) 国籍を超えた、イスラム教徒による学生組織がある（「イスラム留学生会」等）
- 2) イスラム圏の国の、出身国別留学生組織がある（「マレーシア留学生会」等）
- 3) ムスリム留学生が集まる機会はあるが、組織としては活動していないと思う
- 4) わからない

13. 対象をムスリム留学生に限定したガイドブックを発行・配付していますか？

- 1) している 2) 作成の計画がある
- 3) 作成を検討したことはある 4) していないし、検討したこともないと思う

14. ムスリム留学生に対して礼拝用施設・設備を提供していますか？（複数回答可）

- 1) 利用者をムスリムに限定した礼拝用施設がある
- 2) 宗教を特定せず誰でも利用できる礼拝用施設がある
- 3) 特に礼拝用ではないが、ムスリム留学生専用の固定スペースがある
- 4) 一定時間だけムスリム留学生の使用を許可している施設がある（教室や会議室を特定時間予約して利用する等）
- 5) 礼拝前の体の洗浄がしやすいように、工夫されたトイレ・手洗い場がある（足を洗いやすくするために、トイレの手洗い場の高さを低くする等）
- 6) 現在はないが、礼拝用施設・設備の提供について検討はしている
- 7) 特に要望がないので礼拝用施設・設備は提供していない
- 8) 要望はあるが提供できない状態

[質問項目 15 を
とばし 16 へ]

15. 上で 1) ~5) と回答した方におたずねします。その施設・設備提供が、いつ頃から、どのような経緯で始まったのか教えて下さい。

15-1. 提供開始時期 ()

15-2. 提供に至った経緯・主な理由

16. 礼拝用施設・設備の提供は、どのような点で難しいと思われますか？

17. ムスリムは戒律により、食べられる肉や動物性脂質が制限られ、アルコールが使われた料理も食べることができません。学生食堂において、ムスリム向けに何か配慮されている例を知っていますか？（複数回答可）

- 1) 戒律にのっとった食材・調理法によるメニュー（ハラール・フード）を提供している
- 2) 使われている食材や調味料等がわかるように表示している
- 3) 特に配慮していない
- 4) その他 ()

18. ムスリムの宗教的ニーズへの対応を充実させることは、貴大学の今後の国際戦略にとって重要でしょうか？理由もお教え下さい。

- 1) 重要である
- 2) 多少重要である
- 3) あまり重要ではない
- 4) 重要ではない

理由 :

19. その他、ムスリム留学生の学習環境、教育・研究指導についてのご意見をお聞かせ下さい。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

【資料】オーストラリアの全大学における礼拝施設開設状況

州	大学名	ウェブサイト	礼拝室
ウェスタンオーストラリア州	Curtin University of Technology	http://www.curtin.edu.au/	◎
ウェスタンオーストラリア州	Edith Cowan University	http://www.ecu.edu.au/	◎
ウェスタンオーストラリア州	Murdoch University	http://www.murdoch.edu.au/	◎
ウェスタンオーストラリア州	The University of Western Australia *	http://www.uwa.edu.au/	◎
クイーンズランド州	Bond University	http://www.bond.edu.au/	
クイーンズランド州	Central Queensland University	http://www.international.cqu.edu.au/	◎
クイーンズランド州	Griffith University	http://www.griffith.edu.au/	
クイーンズランド州	James Cook University	http://www.jcu.edu.au/	○
クイーンズランド州	Queensland University of Technology	http://www.qut.edu.au/	◎
クイーンズランド州	The University of Queensland *	http://www.uq.edu.au/	◎
クイーンズランド州	University of Southern Queensland	www.usq.edu.au/international/	◎
クイーンズランド州	University of the Sunshine Coast	http://www.usc.edu.au/	
サウスオーストラリア州	The Flinders University of South Australia	http://www.flinders.edu.au/	◎
サウスオーストラリア州	The University of Adelaide *	http://www.adelaide.edu.au/	◎
サウスオーストラリア州	University of South Australia	http://www.unisa.edu.au/	◎
タスマニア州	University of Tasmania	http://www.utas.edu.au/	◎
ニューサウスウェールズ州	Charles Sturt University	http://www.csu.edu.au/	◎
ニューサウスウェールズ州	Macquarie University	http://www.mq.edu.au/	◎
ニューサウスウェールズ州	Southern Cross University	http://www.scu.edu.au/	◎
ニューサウスウェールズ州	The University of Sydney *	http://www.usyd.edu.au/	◎
ニューサウスウェールズ州	University of New England	http://www.newcastle.edu.au/	◎
ニューサウスウェールズ州	University of New South Wales *	http://www.unsw.edu.au/	◎
ニューサウスウェールズ州	University of Newcastle	http://www.newcastle.edu.au/	◎
ニューサウスウェールズ州	University of Technology, Sydney	http://www.uts.edu.au/	○
ニューサウスウェールズ州	University of Western Sydney	http://www.uws.edu.au/	◎
ニューサウスウェールズ州	University of Wollongong	http://www.uow.edu.au/	◎
ノーザンテリトリー	Charles Darwin University	http://www.cdu.edu.au/	
ビクトリア州	Deakin University	http://www.deakin.edu.au/	◎
ビクトリア州	La Trobe University	http://www.latrobe.edu.au/	◎
ビクトリア州	Monash University *	http://www.monash.edu.au/	◎
ビクトリア州	RMIT University	http://www.rmit.edu.au/	◎
ビクトリア州	Swinburne University of Technology	http://www.swin.edu.au/	◎
ビクトリア州	The University of Melbourne *	http://www.unimelb.edu.au/	◎
ビクトリア州	University of Ballarat	http://www.ballarat.edu.au/	◎
ビクトリア州	Victoria University	http://www.vu.edu.au/	◎
首都特別地域	The Australian National University *	http://www.anu.edu.au/	◎
首都特別地域	University of Canberra	http://www.canberra.edu.au/	◎
複数州	Australian Catholic University	http://www.acu.edu.au/	宗教系
複数州	The University of Notre Dame Australia	http://www.nd.edu.au/	宗教系

*は研究重点8大学

表中◎はムスリム専用礼拝室が確認できた大学、○は宗教不特定の礼拝室のみ確認できた大学

留学生の宗教的多様性への対応に関する調査研究
—イスラム教徒の事例を通して—

発 行 2009 年 3 月

発行者 〒920-1192
金沢市角間町
金沢大学理工学域留学生教育研究室
岸 田 由 美